第29期社会教育委員の会議

第５回定例会

議事録

令和３年11月15日

【１】開催日時

令和３年１１月１５日（月）１８時３０分～２０時３０分

【２】開催場所

世田谷区役所第２庁舎４階　区議会大会議室

【３】出席委員

坂倉委員（議長）、堀井委員（副議長）、小泉委員、鍵和田委員、

村上委員、権田委員、山崎委員、吉岡委員、新海委員

【４】出席職員

教育委員会事務局

内田生涯学習部長、谷澤生涯学習・地域学校連携課長

御園生社会教育担当係長、清野社会教育係主任

【５】傍聴人

無し

【６】次第

１　第４回議事録の承認

２　議事

（１）新たな連携・協働のしくみづくりに向けた課題の

抽出・整理と方策について－グループワーク②－

（２）各グループ発表

（３）全体での意見交換

３　その他

（１）次回の日程について

（２）その他

○議長　では、皆さんおそろいということで、社会教育委員の会議を始めます。延びて延びてという感じで遅くなってしまいましたが、皆さん、今日もどうぞよろしくお願いいたします。

本日、奥平委員が御都合により御欠席となります。

今日の議題に入る前に、まず前回、第４回の議事録の承認をさせてください。事前に事務局より皆さんには御確認いただいていますが、いかがでしたでしょうか。特に問題ないようでしたら御承認いただければと思いますが、いかがでしょうか。大丈夫でしょうか。

――ありがとうございます。では、この会議の終了後に鍵和田委員と新海委員に署名していただきますようにお願いいたします。あわせて、今回の議事録の署名については山崎委員と吉岡委員にお願いしたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

前回グループに分かれて学校と地域の連携、学校をどのように地域に開いていくのかという主に現状とか、なぜそれが必要なのかとか、あるいはそれに向けての難しさなどをグループに分かれて話しました。今日はその続きで、ちょっと時間が開いてしまったんですけれども、前回出てきた御意見を参考にしつつ、どのようにこれからやっていくとうまく連携ができるだろうか、地域に開かれた学校ができるだろうかということを考えていただく。アイデアをみんなで考えていく予定になっております。残り回数がもう少なくなっています。この２回のワークを踏まえて今回の第29期の取りまとめに入っていきますので、今日はぜひいろいろなアイデアを出して、まとめの素材をたくさん増やしていきたいなと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

進行はすぐワークショップを始めてくださいとなっているんですけれども、急に分かれてどうですかというのもあれなので、ちょっと一言ずつ近況を一言いただいてから分かれたいと思うんですけれども、いかがですか。よろしいですか。

○副議長　大学の近況についてお話をすると、うちの大学はずっと対面でやっていますので、コロナが増えても、減ってもあまり変わりがないんです。ただ、一方で、非常勤先の大学は、私は対面でやっているんですけれども、ほかのほとんどの先生たちはまだオンラインなんですよ。多分大学の先生がサボり癖がついたななんて、私なんかは大学内にいるから思っているんですけれども、やっぱり学生の声を聞くと、やはり対面に勝るものはないというのは、どの学生も言うことなんですね。

ただ、本当に今懸念しているのは２年生なんですよ。去年１年生で入学して、コロナで全く対面授業をしていない。いろいろ聞くと、アルバイトもできていない、サークルも入

れていない。そう考えると、教育で大切な人と人とのつながりとかが今の２年生ではちょっと分断化されているのかなという気がして、今から心配なんです。そういう意味では、徐々にこうやって、皆さん、ちゃんと対面で会議もできるようになって、私自身もほっとしているところなので、引き続きどうぞよろしくお願いします。このままコロナが収束してくれることを祈るばかりです。

○委員　皆様、こんばんは。私自身としては、仕事はリモートでなくて、ずっと職場に通う形で仕事をしております。ただ、今、青少年委員をしているんですけれども、小学校だったり、中学校だったりに地域の人間として足を運ぶ機会が非常に減っております。先日小学校で行われました運動会には、学校運営委員ということで校長先生に入っていいですよと言っていただいたので、中に入って、久しぶりに子どもたちの様子を見ることができたんですけれども、例年でしたら地域の住民の方々にもどうぞお越しくださいということで、お声がけがされているんですが、なかなかそういったこともできずに、学校も大変苦労しながらではありますが、いろいろな行事を実際に行われているようです。なので、さっきおっしゃったように、このまま落ち着いていけば学校行事は、子どもたちの宿泊行事なんかもだんだん再開されて、子どもたちも思い出に残るような学校生活が送れるのではないかなと期待しております。

○委員　こんばんは。よろしくお願いします。

私自身としては、今日もＢＯＰから来たんですけれども、小学校はＢＯＰが始まりました。ただ、室内の活動はできなくて、校庭だけということで、学校の帰りに一緒に遊んで帰るお子さんも少しずつ増えてきたところです。きっと家に帰っても、今は友達の家に行ったりとかはできないので、学校が終わった後、少しでもお友達と遊べるのはいいことだなと思っています。

もう一つの自分の仕事は、ここ１年半ぐらい、Ｚｏｏｍの会議を中心にずっとやってきて、パソコンで目が疲れているところですけれども、第６波は来ないでほしいなという感じです。子どもたちは、黙食とか、手洗いとか、すごいきっちり守っているので、かわいそう、ふびんな感じもしますけれども、くれぐれも広まらないことを願いつつ、今やっているところです。

○委員　本当に６月から久しぶりだという感じですね。７月、８月の感染爆発があって、いろいろ反対はありながらもオリンピック・パラリンピックが開催されて、私は反対だったんですけれども、いざ、開いてみると結構感動していまして、やれてよかったなとは思

います。

前回の長文を昨日、今日と読み返してみて、１つ気がついたことは、大きな問題だと思うんですけれども、果たして学校は連携を望んでいるかどうかとか、地域が連携を望んでいるのかどうかというような課題、問題提起がこの前はあったんですが、もう望んでいるという前提でいかないととは言わないです。無理して言っちゃいけないと思うんですけれども、私は望んでいるというのは多分間違いないんじゃないかなと思って、それを前提にこれからの会議に出ようかなと今日は決心して来た次第です。

以上です。よろしくお願いします。

○委員　皆様、こんばんは。小学校は１学期の終わりから感染者数が多かったので心配しまして、２学期はどうなるかなと思いましたけれども、びっくりの激減で、学校は、おそるおそるですけれども、行事も行われて、子どもたちも順調に通っていて、本当に何よりだなと思っています。６年生は昨年、川場に行けず、今年、日光にも行けないようではあまりにもかわいそうと思っていたので、何とか修学旅行も行けてよかったですし、今の中学３年生も延期で何とか３月頃に修学旅行に行ければというような状況で、お子さん方にとって大事な行事が何とか行われそうなので、あるいは行われているのでよかったなと思っております。

私自身は地域で、昨年はこんなに家にいていいんだろうかというような状況でした。パソコンに向かう時間が増えましたけれども、減少に合わせて徐々に会議も戻ってきましたし、活動も戻ってきて、昨日は地域で防災訓練もいたしましたし、11月の初めには子どもたちが地域を知るための親子でウォークラリーというような行事も無事にできました。そんな状況で、少しずつ戻りつつあるんですが、このまま本当に大丈夫なんだろうか、第６波はやっぱり来るのかな。そこは油断をしないでいかなければいけないなと思っているところですけれども、平常に戻りつつあるというのは大変うれしいことだなと思っております。ただ、集まれないのは本当に残念だなというのが正直なところです。そんな中で何とか無事にいることができております。

○委員　よろしくお願いします。私のやっている活動は久しぶりに実際に御飯を作ることができる、学校が許可をくださって、食べるのはだめだけれども、作るのまではいいですよと校長先生がお話しくださったので、11月の頭に活動したんですね。子どもたちもすごく喜んで、久しぶりに集まって、久しぶりがゆえの楽しさもあったらしくて、いろいろ話してくれたんですけれども、こういう活動に来る子たちは勉強よりも自治活動的なことが

好きで、いろいろな会のものに立候補するんだけれども、なかなか推薦してもらえなかったりなんていう話をしてくれたりとか、そんなリアルな話を聞くことができて、コロナでみんなと集まれなかったから、よりそういうことに興味が出たんだなんていう話をしてくれていました。なので、早くまた一緒に御飯を食べるところまでやりたいなということをするとともに、兄弟がいる方がいて、下の子が５年生なんだけれども、川場に行かれて、すごく喜んでいたということで、みんなでお泊まりに行くとか、日常とはちょっと違う経験というのは、子どもたちにとってはすごく貴重なことなんだなと感じたところです。

〇委員　世田谷区青少年委員としてこちらへ参加しています。

世田谷区青少年委員会は、１人１人の役目である地区の小学校、中学校とまちづくりセンターを中心にした活動も、所属している地区委員会は集まりますけれども、やはりイベント等、地域の人を招いてというのはいまだ中止になって、本当に残念です。今後うまくコロナが収まって、またそういう活動が再開しても、２年間もやっていないとみんな頑張ろうという熱意が、僕自身もそうですけれども、ちょっと冷めちゃっていて、再びまた以前のように、よし、いろいろなことをやろうという熱が果たしてぐっと上がるかというのが心配で、いいよ、いいよ、やらなくていいよという安易な方向に……。今はそんな感じですから、それがまたしばらく、いや、そんな無理をしなくてもいいよみたいなことが多くなるんじゃないかなと思って、そこを今後の復活に対して心配しております。

〇委員　よろしくお願いいたします。校長としての今の一番の願いは、第６波、来るなということです。緊急事態が閉じてから大分いろいろなことが元に戻りつつあります。もちろん制約のある中で、いろいろと方法を工夫しながらですけれども、運動会も行いましたし、本校だけの事情ですが、今週末には学芸会も行う予定です。もちろん子どもが一堂に会したりすることはできませんし､保護者の参加も各家庭１名までと限らせていただいて、席をすごく離して、換気もして、本当だったら暗幕を閉じて暗くして、スポットライトということにもなるんでしょうけれども、今回は換気もあるので、そこもできないという制約もついています。ただ、それでも、そういったことができるようになってきたことを、ああ、こんなにうれしいものなのだなと感じています。

本校は、６月に予定されていた川場移動教室も延期になり、これは全校ですけれども、夏の日光も延期になりまして、今月末、11月29日、30日、12月１日という予定で日光に行きます。川場には12月14日、15日という予定で行きます。日光で本校が泊まるところは湯元という奥日光の一番標高の高いところなので寒いだろうな、恐らく朝夕は氷点下かなと

思っています。川場も最低気温はもう１桁台の低いほうになっていますから、12月14日、15日はやっぱり氷点下かな。果たして何ができるんだろうと思いつつ、もうお泊まり会のような形でもいいかな。子どもたちを連れていって、仲間と一緒に過ごせる楽しさを味わわせたいなと考えています。なので、もう絶対に感染者は増えてほしくないというのが心からの願いです。

先ほど連携を本当に望んでいるのかというようなお話もあったんですけれども、私は一校長ですので、世田谷区内全ての100人近くいる校長の全意見を代表するものではありませんけれども、私は少なくとも心から望んでいます。というのは、今回、運動会とか、そういったことをやるときに、あるいはいろいろなことが中止になっているから、少しでも子どもたちに楽しみを与えるためにということで、ＰＴＡがすごく協力してくれています。ＰＴＡイコール保護者ですので、保護者とはつまり地域住民ということですので、もうこのつながりなくしては学校は成立しないなと思っています。今回ＰＴＡがいろいろやってくれている中ですごく楽しそうにやってくれているので、例えば子どもが卒業しても、学校に力を貸そうというお気持ちは残してくださるのではないかなと考えています。そんな形で連携を深めていけたら本当にありがたいなと思っているので、私は強く望んでいます。ＰＴＡは本当にいろいろな工夫をして、学校と協力して、学校ももちろん協力していますけれども、協力してやったいろいろなイベントは本当に面白いものがいっぱいあって、これをしゃべり始めると今日の会議は多分終わっちゃうので、何か御関心があれば、また多聞まで問い合わせていただければと思います。

○議長　ぜひこの後もグループワークで前向きなＰＴＡの方が、何でそんなに喜んで、熱意を持ってやってくださるのか、その辺のお話とかも伺えればと思います。

第６波、来てほしくないなというのは、大学生１年生、２年生、コロナ世代と言われていて、友達って、どうやってつくるんだっけみたいなところから、全くそれまでの学生生活が変わっていて、あまりにも窮屈過ぎてかわいそうなので、私、この夏、個人的につながりのある離島とか、九州のまちとか、インターンに出して、２週間とか、行ってもらおうかなと思って、９人行きたいと手を挙げてくれたので、おっ、これはよかったと思ったんだけれども、結局３人しか行かなくて。それは、向こうの事情で、県のガイドラインが解除にならないうちはちょっと難しいとか、学生のほうが、まだワクチンを打っていないし、迷惑になったらいけないというふうに自粛しちゃうみたいなところもあって。でも、３人行けてよかったなみたいに思っていて、今は収束したんですけれども、２月にまたそ

んな状態になって、また行けないみたいなことになると本当にかわいそうだなと思います。学期中、学校に行けるのも大事なんですけれども、休みの期間に自由に動けるという経験を制限されてしまうのは本当にかわいそうだなと思ったりしております。それは、小学生も、中学生も全く同じだと思います。

とはいえ、うちのゼミ生は、この夏の間は研究室をつくるという作業をしていたので、ずっとリノベーション作業をしていました。全員来るわけではないんですけれども、まだできなくて、今日も作業して、今週から展覧会、展示をしようと言っていて、今すごい一生懸命つくっているんですけれども、改めて思うのは、オンラインでのグループワークが圧倒的に多かったので、物理的に展示パネルを作るとか、そういうスキルが全然伝承されていないんです。これまでだったら先輩がやっていることを見て、教えなくてもできていたことが、どうやっていいか、全然分からない。そういうところで、１人１人の成長だけでなく、グループとしての知識やスキルの伝承も断絶してしまうところがあるなと思っています。要らないものは伝承しなくていいと思うんですけれども、いいところは続けていきたいななんていうことを思いながら今日も参りました。ということで、久しぶりで、コロナの状況がどうなるかは分かりませんけれども、それとは別に学校の連携の話を今日はできればと思っております。

グループに分かれる前に、おやまちプロジェクトで最近の取組の情報共有をしておきたいなと思うんですけれども、コロナでもあまり不便がなくて、尾山台中学校なんですが、総合的学びの時間、総合学習の時間を使って、おやまちプロジェクトと尾山台中学校で新しい授業をつくりました。７月から始めて、この間の10月まで、夏休みを挟んで５回ぐらいだったかな。14歳のファーストプロジェクトという名前ですけれども、何をやったかというと、中学生が実際の地域のお店や事業者の課題を聞いて、それに答える、提案をするというプロジェクトで、実際に本屋さんとコーポラティブハウスというマンションですね。入居者がまず集まってから、間取りとかを決めて建てるタイプのマンションがあって、再来年の春にできるんですけれども、その２つの会社の人たちが学校に来て、２年後に引っ越してくる住民のために中学生の視点でまちの魅力を教えてくださいとか、今度新しく通りに本屋をつくるので、すごく小さい本屋なんだけれども、子どもたちにいっぱい来てほしいので、小学生が買いに来てくれる本屋にするにはどうしたらいいですかみたいな課題を中学生に考えてもらって、その授業自体は大学生が設定して、進行する。まず最初に、じゃ、まちのことを知らなきゃいけないから調査に行こう、調査ってどうやってやるんだ

みたいな授業を大学生がつくって、夏休みを挟んで持ってきたものをグループに分かれて、じゃ、つくっていこうというその提案のつくり方とか、プレゼンテーションの仕方みたいなものを大学生が伴走してやって、この間、発表してという形だったんですけれども、コロナだからという制限があまりなく、割と先生方もオープンにしてくださって、学生にとってもすごくよかったし、私たちにとってもいい経験になった。

授業としては終わりですけれども、実はそれだけでは終わらなくて、本屋さんはオープンして続けているので、要は中学生が実際にその本屋さんの運営とかプロモーションに関わる。子ども店長をやってみようとか、今度本屋さんを装飾してやるのが雲の本屋さん。本屋さんを雲みたいにして、空とか天気の本をいっぱい置きましょう、この間の授業の中で出てきたアイデアを実行してみましょうみたいなことをやったり、コーポラティブマンションのほうも１月に住民にインタビュー、ヒアリングをして、３月に地鎮祭があるので、そのときに尾山台中学校に来てもらって、中学生が入居者に対して地域の案内をする話になって。そちらは有志ですけれども、そういう展開になっていたり、あるいは尾山台小学校の先生が、中学で何かおもしろいことをやっているみたいなので、小学校でもやってくださいみたいなことで、先週学生と一緒に行って、それは職業調べとか地域のキャリア教育の一環ですけれども、小学生が実際にまちに出て、大人がサポートしてくれるんだったら何をしたいみたいなことを話し合って、学生が入って、前にこんなプロジェクトをやっていたよみたいなことを話しているうちに、それをやりたいとか言って、どれくらい実現するのかはまだ未知数ですけれども、夕方、ホコ天になる時間帯があって、子どもが屋台をやりたいみたいなことを言っていて、じゃ、屋台をやればいいじゃんみたいな話になったんですね。要は、例えばお肉屋さんで売っているコロッケを、店の前に屋台を出して売るというのを小学生と一緒にやるみたいなもの。小学生は売るだけではなくて、どうやって宣伝したら買ってくれるかとか、そういうこともお店の人と考えてやるみたいなことをいろいろなお店でやると、小学生が売っている屋台みたいになって、商店街全体としても楽しそうなので、乗ってくれるお店もありそうだから、受験が終わってから、６年生と２月ぐらいにやろうかみたいな話になって。

その後に卒業式があるので、卒業式が終わった後、６年生が商店街へ行って、まちの人がおめでとうみたいなパレードをやったことがあるんです。去年はできなかったんですけれども、お店の人がそんな感じで小学生と一緒にお店をやった１か月後に、地元小学生の門出を祝えるんだったら、みんなやってくれそうだよねみたいな話をしていて、そんな展

開が最近ありましたという報告ですけれども、私の実感としては、むしろ中学校、小学校の先生からこういうことをやりたいんだけれどもというふうに声をかけていただいて、逆にこちらから提案すると、面白そうだからやりましょうみたいな形でいろいろ一緒にやるからこそできることが起こっているので、逆にそうなりにくい理由というのはちょっと分からないところもあるんですが、この後の話では、そういうことも起こり得るけれども、実際難しい点はどういうところにあるのか、それを乗り越えるにはどうしたらいいのかみたいな話をできればいいかなというふうに思っています。話題提供というか、近況報告が長くなってしまいましたけれども、そんな動きがありました。

　ということで、この後、グループに分かれて、事務局、議事の日程ですけれども、時間としては７時50分までグループワークという理解でいいですか。

○事務局　目安ですけれども、19時50分までにグループワークを終えていただいて、大体10分間でそれぞれのグループから発表していただき、20時から全体での意見交換という形ではどうでしょうか。

○議長　分かりました。これから７時50分までグループに分かれて議論していただければと思います。今回はメンバーをシャッフルさせていただいて議論したいと思います。何か疑問とか、質問とか、ありますか。メンバーが入れ替わったり、少し時間が空いているので、冒頭簡単に、前回に議論のまとめがありますので、こんなことを話したよねというのを少し思い出していただいて、どのようにやっていくとうまくいくだろうという議論を、その後、していただければと思います。よろしいでしょうか。皆さん、どうぞよろしくお願いいたします。

〔地域グループ〕

○議長　いや、前回は本当にいい話ができた記憶はあるんですけれども、なかなか細かくは。何となく振り返って、皆さんも思い出したことがあれば、こんな話題があったよみたいなことを伺えればと思うんです。冒頭、最初にも書いてありますけれども、何でそもそも連携が必要なのというときに、ずっと住み続けられるまちであるために、学校は地域の核であり、一緒に何かやらなくてはいけないのだというのが最初のほうにばんと出たのがすごく印象的で、教育のためとか、地域活性化のためとか、そうではなくて、ただ単に、世代が変わってもそのまちで暮らせるまちであってほしいなというのがすごく印象的でした。子どもは未来だし、子どもが生き生きと育つまちだったら、流入してくる人も多いだ

ろうし、出ていきたいという人も少ないだろう。そうすると、持続可能だし、いろいろな世代の人が一緒にいるまちというのはすごくいいなという話だったかな。

ただ、課題としては、どんどん開いていきたいんだけれども、都市だし、やみくもに開くとリスクも増えるし、どんな人が来るか、分からないので、オープンにしづらいという難しさがあります。そのときに誰でもいいというわけではなくて、顔の見える関係が広がっていくのが必要だけれども、具体的に顔の見える関係がどう広がっていくんだろうかが難しさとしてありますねというのがありました。

地域から学校に対する期待というのは、みんな知っている場所だし、何かをするにしても、その場所を使わせてもらうことによって、コミュニティーやいろいろな活動が実現できるので、あるだけでいいというか、空間があるだけでもすごくいいという話も出ました。だから、そもそも地域に顔が見えるいろいろな関係性がたくさんあればあるほど、学校が開いたときのリスクも減るし、学校を縁にして、またいい形で関われるんじゃないかというような話がありました。その関係はどのようにつくれるのかというところが課題だと思います。

あとは、学校の先生の役割ですけれども、逆に先生方の考え方が結構あるので、一律にこうだよと言うよりかは、その人の考え方を尊重して、地域に合わせてやっていったほうがいいのではないか。とはいえ、小学校、中学校の先生というのは、学校長として子どもの教育に責任を持つだけじゃなくて、地域の中の一部でもあるという意識を持つ。公民館の館長みたいな気持ちでそういう役割も担ってもらえるといいんじゃないかというお話がありました。何か補足がありましたら、ぜひ今日いただけると。

○委員　ウィン・ウィンの関係という話、１つの事柄で出ました。もちろんそれは理想だと思うんですけれども、どうしても学校は地域にお願いします、地域はお願いされて、じゃ、何をすればいいのかというような１つのそごが出てくるのかな。現実問題になるけれども、最近の台風とか、地震とかで、地域の人間として、学校が避難所になるメリットは物すごい大きいなと思っているんですね。安心感といいますか、安心安全な地域という意味では、地域の人間としては、近くの学校が、いざとなったら、非常にいい１つの存在かなというのが正直なところでありまして。

ハザードマップ、もちろん広域避難場所はあるんですけれども、やっぱり一番身近なものは学校。今までは中学校ですけれども、こういうものが１つの安心安全につながっているのかなというのが１つ。かといって、地域が学校に何をすればいいのかという具体的な

ものが出てこない。例えば今年のように、コロナがあるから運動会もない、学芸会もない。ふだんは御招待があれば行ったりしているんですけれども、それもできない。今年はちょっと異質なのかなという感じはしますけれども、その辺のウィン・ウィンの関係と地域として学校でどうやっていくのか。地域の人間としては、学校があってすごく安心安全だなというものがあったんだけれどもというのが今年の場合には実感でした。洪水とか台風が多かったからね。その心強さというのかな。

○委員　今、テーマをおっしゃったけれども、地域としては幾らでも学校に協力するという気持ちもありますし、学校自体がありがたい存在ですから。学校の先生方、学校が何ができるかということに関しては非常に難しいとおっしゃっていますけれども、特に中学校。でも、私は、そこは必ずしも対等でなくても、相互に連携したり、協力、協働できる要素が少しでもあれば、それはそれでいいんじゃないかなと思ったりするんですね。ですから、先生方、時間がないところを無理やり地域のためということでなく、また、地域によっても状況が違うので、どこも全く同じようにやらなきゃいけないというものでもないと思います。備えのないところでできるものを見つけていけば、必ずしも互角でなくてもいいし、違ってもいいんじゃないかなと思います。

○議長　ある意味そうですね。無理なく。

○委員　無理がないほうがいいと思います。

○委員　多分私の中ではまだ中学校という発想があって、うちの近くに中学校があるものですから。小学校では、夏休みの何とか教室に割に地域の人が呼ばれているんです。そういう意味では小学校と中学校では、今ちょっと尾山台中学校の例が出ましたし、とてもいい成功例だと思うんですけれども、これから１つのアプローチする方法だと思います。総合学習の時間とか。そういう意味では、小学校なんかは地域との密着度は多分大きいですね。

○議長　何で尾山台中学校だとあんなふうにできるんですか。

○委員　学校の姿勢もあるんじゃないですか。先生からアプローチしたわけじゃないんですか。

○議長　いや、そんなわけでもないです。ちょっとしたつながりはありましたけれども。

○委員　小学校でそういうものができたから、それの影響を受けているというのはあるんじゃないかと。

○議長　それもあるかもしれませんね。

○委員　学び舎で一緒だから。

○議長　もともと視聴覚室は結構空いているから、いつでも使っていいよとか言われていて。だから、全然中学校と関係ないワークショップとか、地元のクリニックの先生を呼んできて、医療系の地域医療を考えるワークショップとかというので使わせてもらったりとか、先生も参加してくださったんですけれども、部室とかにしてもいいぐらいの勢いで言われて……。

○委員　やっぱりかなり学校のスタンスが大きいと思います。

○議長　そうなんです。

○委員　学校によっては分掌の中に地域担当をつけている学校もありますし、そういうものに全然関心のない学校も反面ある。だから、その辺の学校のスタンスというのが大きいですね。小学校は夏休みのワークショップで地域の中に必ず入っています。

○委員　先生のそういった医療系のワークと学校をつなげる人は誰なんですか。

○議長　そのときは直接校長先生で。お願いをしに行くというか、立ち話みたいなにときに、いや、何かあったら使っていいですよみたいに言われていて、こういうワークショップがあるんですけれども、いいですか、いいですよと言われているだけですから、何なんでしょうね。

○委員　そのときによく言われるのは、やる人たちはいいけれども、知らない外部の参加者、どんな人が来るか分からないから学校にそういうものはとよく言われることがあるんですけれども、どうなんですか。

○委員　どちらかというと、子どもたちの安全とかを考えると、ちょっと閉鎖的になってしまう部分もなくはないと思うんです。

○委員　なので、開くときに、誰に貸すのかというのは学校はすごく……。

○委員　そうしたら、先生に信頼があるんじゃないですか。

○議長　私というか、おやまちプロジェクトは地元の人とかがやっているので、変な人が来るとは思っていらっしゃらない。学生も地元の学生なので。

○委員　目が行き届くということも……。

○委員　お互いが分かり合えているというのが大きいんでしょうね。

○委員　備品を壊したとか、何がないとか、もめ出すと結構いろいろなことがちょっとずつ……。

○委員　やっぱり地域のムードですよね。おやまちプロジェクトを基にした雰囲気、ムー

ドが出来上がっていくとアプローチしやすいですよね。

○委員　リスクよりもメリットのほうが多いという感じがお互いに分かる。何でもリスクはあるので。

○議長　確かにそうですね。リスクよりメリットがある。

○委員　防災訓練のようなときに、中学校の中でも小学校の卒業生に声かけをしてもらったりして有志が出てきてくれる学校もあれば、部活などが忙しくて、なかなか参加は難しいですと言われてしまうことのほうが多いので、よっぽどお子さん方に興味があって、面白そうだと思うものがね。

○委員　面白そうだというのは大事です。

○委員　そういうのは、企画がとてもいいからなのかもしれませんし、子どもが興味を持って、好奇心を駆り立てるようなことがその中にあるのかもしれないですね。

○議長　もちろん何でもいいわけじゃない。地域の人だから、学校の先生がつくるよりも面白そうだなと思うものがあれば、もちろん先生も紹介しやすいですね。

○委員　親も行ってみなさいってね。結構親の声がけは大事ですよ。お手紙を見て、面白そうじゃないかとか。

○委員　地域で顔見知りとか、人のつながりをしっかり持っておくことが、やっぱり学校から見ても安心感を持てる。何かをやるには、それもやっぱり大事な要素だと思います。

○委員　地域をぶらぶら歩いたりしていますか。とてもお顔があれなので。

○委員　子どもたちと挨拶とか、小中学校に行っているせいか、地域でも、こんにちは、気をつけてねという会話を自然にするおばちゃんみたいな感じです。

○委員　そういう意味では、地域というものを分析する必要はありますね。

○議長　そうですね。

○委員　例えばＰＴＡとして親、保護者としての地域、町会。高齢者が多いですけれども、青少年委員さんとかが関わっている地域、介護。だから、そのように幾つか分析しておかないと、地域を全部一緒くたにしても、なかなか具体的な案が浮かばないかなという感じもします。

○委員　地域の方も学校、子どもさんのいろいろお手伝いができたらと思うんですけれども、そのきっかけを自分からつかめない。そういうときにＰＴＡの人たちと我々なんかで接点があると、そこから広げていけたりするんですよね。だから、つなぎ役、パイプ役、そういう人がいると安心感もある。この人が知っているんだったら大丈夫という安心感も

あると思いますし、そのパイプ役にはＰＴＡの方も必要だと思いますね。

○委員　そのＰＴＡの方は、お子さんが小学校、中学校を卒業された後、地域のほうに関わってくださることが多いですね。

○委員　そうなんです。

○委員　アフターＰＴＡですか。

○委員　ＰＴＡは人材の宝庫ですから。

○委員　私も青少年委員だったときに、ＰＴＡで役員をされた方々がたまたまうちの自治会にいて、今度自治会でこれをやらなきゃいけないから一緒に手伝ってと。今一緒に役員をやっているんだけれども、そういうつながりができますので、ＰＴＡというものは大事な存在。学校としてもそうでしょうし、地域としても。

○委員　いきなり地域の活動に参加しませんかとスカウトするよりも、ＰＴＡのときに地区委員会だとかというので関わられた方で、じゃ、お手伝いしますと入ってこられる方が多いですから。

○委員　そういう意味では、ＰＴＡは地域と学校とのジョインターですね。

○委員　そうだと思います。ただ、自治会に入っていらっしゃらないＰＴＡさんは多いんですよね。ではありますけれども、何らかそういう顔見知りである、そういうところで接点があったことをきっかけに後から入ってくださる方もありますので、ＰＴＡだけじゃなくて、地域からもそういうジョインターがいたほうがより強固にできますね。

○委員　皆さん、アフターＰＴＡでしょう。

○委員　そうですね。

○委員　かなりアフターです。

○委員　大体関わっていますからね。そういう面から見た地域とのつながりというのは大きいですね。さっきの校長先生のお話を聞いて、例えば運動会でああいう活動ができた。そうすると、どこでつながるのかなと思うと、ああいうふうにして学校行事としてつながる場合もあるし、例えばスポーツ大会。子どもたちは、マラソン大会とか、ボウリング大会とか、スポーツ大会とか、あるいは例えば福祉活動。イベントというのが決まってきますよね。まちづくりのおやまちプロジェクトみたいな形で。だから、やっぱり何かイベントを１つのあれにしていくことが。

○委員　きっかけにはなります。

○委員　おやまちがいいのは、生活感がある感じ。別に得意じゃなくても、やって、楽し

そうな感じ。

○委員　特別というよりは、ちょっとやってみようかなと思えるようなサイズ感というんですか。

○委員　スポーツだと得意、不得意がありますよね。

○委員　上手、下手があるからね。

○委員　何とかコンクールとかなると、学芸会もそうなんですけれども、いやいや、ちょっと主役はみたいな。気が引けちゃいますというか……。

○委員　子どもの頃ってお店屋さんごっことかあるので、そのときだけの大きなイベントとかという大上段からのものでなくて、そういう日常的なことでわくわく感がある。

○議長　この間、今の大学生がホコ天でやるのが、このコロナで経験がないから、試してみようというのでやっていたんですよ。人工芝を敷いて、机を出して、通りでいろいろ話合いをしてというところで、本屋さんのプロジェクトに参加したい中学生が本屋さんと打合せに来ていて、中学校の先生は別の相談で来ていて、みんなごちゃごちゃにそこにいて、何をやっているんだ、みたいな話とかをしていました。そうすると、今言った生活感がすごいある中で、ちょっと本屋さんを手伝おうみたいな子がいるというのが見えるし、先生側からしても、ああ、そういうふうにやっているんだというのが見えるし、何がいいのか分からないですけれども、見えるのがいいですね。

○委員　生活が豊かな感じ。金銭とかなんとかというのではなくて、何となく居心地がよくて、行くと、豊かだな、居心地がいいなという場を醸成するのが地域だったり……。

○委員　中学生は、いらっしゃい、いらっしゃいというのが好きですよね。

○委員　多分。思っきりやってみたい。

○委員　綿あめだの、かき氷、綿菓子とかをこんなにしてやるのが好きですよね。

○委員　なかなかできないですからね。

○委員　売上げとか、結構これは……。

○委員　大人が手取り足取りやるよりも、やらせたほうがいいですね。中学生なんかは。

○委員　料理の活動を少しだけ前に教えていたんですけれども、そうじゃなくて、ある程度、こんな感じです、あとはお好きにと言ってやると結構みんな楽しく、味を好きにやってみたり、自分のアレンジや工夫を入れてできたものは格別な感じなので、自由に。だけれども、ちょっと大人っぽいというのがすごく……。

○議長　商店と小学生が一緒に何かをやるというのは、まだやっていないんですけれども、

結構いいかなと思っていて。絶対に親は買いに来るじゃないですか。

○委員　それはウィン・ウィンですよね。

○議長　いつもより確実に売上げが上がりそうだし、子どもがずっと売っていたら、そうじゃなくてもみんなも何を売っているんだろうと見ていくから、それだけで通る人も楽しいし、お店の人も多分子どもに関わりたいと思っている人が多いと思うんですけれども、そういうきっかけにもなるし、いろいろな意味でよさそうだなみたいな話をしていって……。

○委員　何か楽しそうな気がします。

○委員　そのお店は、軒並みというか、つながって、隣同士のお店がそのようにとかという感じになるんですか。

○議長　いや、まだ分からないんですけれども、３つとか４つだけでやるかもしれないし、学年全体でやるので、10とか20とか――20は無理かな。そこそこたくさん出す形になるかもしれないし、実はまだ分からないんですけれども。

○委員　子どもたちは有志なんですか。

○議長　小学校の総合の時間なので、一応子どもたちはみんな参加するんだけれども、これは半分雑談ですが、放課後だと結構行けない人もいるのを気にするんですね。放課後の時間だと行けない子もいるからどうしようか、でも、準備はできるよねみたいな話で、例えば３時間目、４時間目の時間にフィールドワークに行って、企画をして、お店を出して、お店を出したときには来られない人も参加できるよねみたいな話とかはしていました。

○委員　すごいフレキシブル。

○議長　学校はすごいフレキシブルなんです。そんな感じで一緒にやっていると、授業の組み方も、私のウェルビーイングの研究とかもあって、中学生と一緒にウェルビーイングを学べるカードゲームを開発しているんだけれども、中学校とかでやってもらえますかとか言ったら、ぜひやろうみたいな感じで、来月、２年生全員にやってもらって、データを取らせてもらうんです。そういうものがあるんだけれどもと言ったら、いや、ウェルビーイングははやっているから、ぜひやりたいと言って、いろいろ授業を調整してもらって、道徳の時間でやることになります。完全にもう雑談ですが、道徳の授業は何~~こま~~コマかやらなきゃいけないんだけれども、何にもネタがないと面白くない教科書どおりにやらなきゃいけないから、先生もあまりやりたくないらしいんですよ。だから、道徳の時間にゲームをやれば道徳になりますよと言えば、みんな喜ぶから、調整しやすいんですよ。何月何

日の何時間目と何時間目は道徳の時間にしますみたいにしてくれて、ああ、そうかと。

○委員　先生が学生さんと行かれて、その時間を持っている。

○議長　私の研究プロジェクトのメンバーで行って、学生も誘ってやるんです。それも４クラスあるんですけれども、４クラスをどうやってやるんですかと。この夏、結構衝撃的だったんですけれども、私が１人行けば、ほかの３クラスは全部Ｚｏｏｍで見ているので大丈夫ですと。実際そうなんです。尾山台小学校は３クラスあるんだけれども、最初の時間はクラスごとに相談して、アイデアをまとめる。そこには学生が入って、私は見回っているだけ。２時間目にクラスの代表者が会議室に集まって、じゃ、具体的に何ができるかという相談をするんですけれども、この相談をみんな中継で見ているんです。教室の子は、みんなが提案したものがどのように採用されるのか、Ｚｏｏｍの中継画面を食い入るようにして見ている。

○委員　代表はどきどきしますね。

○議長　教室の中だけで完結しなきゃいけないみたいな常識が既にもうなくなっていて、すごい面白いです。

○委員　ウェルビーイングというのはゲーム形式で……。

○議長　今、私たちがやっているのは５人ぐらいでやるカードゲームで、ある人のお誕生日会を提案する。その人のウェルビーイングの要素がヒントになっていて、手元にある材料を使って、この人が喜びそうなお誕生会をみんなが提案して、一番よかったという人にポイントがもらえるみたいなゲームです。ウェルビーイングというのは、１つは、自分が何が幸せとか、どういうときにいい状態なのみたいなことをちゃんと知るのと相手のいい状態というのは自分と違うので、それをちゃんと想像できて、その人にとってはどういう種類のよさなのかを見分けられるのがウェルビーイングリテラシーだと設定して行っています。

○委員　アサーティブなコンセプトがあるんですね。

○議長　ゲームをやりながら、それを実感できるといいねという考えなんですけれども、割と自由にというか……。

○委員　授業を受けてみたいです。

○議長　ぜひゲームをやりましょう。

○委員　それで最後は総括するんですか。

○議長　まだ日程が決まっただけで、ちゃんと設定しなきゃいけないんですけれども、ゲー

ムはゲームでやってもらうんだけれども、導入と振り返りをちゃんとやって。ゲームは楽しく終われるゲームなんだけれども、やってみてどうだったかというところで、ウェルビーイングというのはこういうことでねという話をして終わろうかなと。

○委員　十分道徳ですね。

○委員　本当にそうですね。

○委員　人の好きなものとか幸せを考えるというのは、ふだんの生活の中ではなかなかない。

○委員　まんま道徳だよね。

○議長　道徳の時間にしてもらえるとうれしいというか。

○委員　なるほど。

○議長　すみません。完全に話がそれてしまった。

○委員　でも、通常の道徳の授業を考えると、ゲーム感覚もあって、そのほうがよっぽど面白いですね。

○議長　子どもにとっても、道徳の時間でゲームができたらうれしいですよね。

○委員　ふだんの道徳を考えたら、多分お子さんにとってはつまらない授業だと思うんです。それを考えたら、知らず知らずに道徳になっているというのがいいですね。

○議長　もうお話を戻すというか、一般化すると、小学校も、中学校も、割と自由に、ある意味地域の資源である我々の持っているものを生かして授業をしたり、課外活動をしたりと結構柔軟にされている印象があって、別のことを言うと相談に来てもらえるというか、小学校の総合の時間もどうしたらいいですかと相談にいらっしゃって、こうしたほうがいいんじゃないかみたいな話をして、じゃ、このように授業をやってみたので、また次も来てくださいみたいな感じ。あらかじめ計画が決まっているわけでもなく、学校側でこのようにしてくださいというのがあるわけでもなく、その辺もポイントかなと思うんですよ。

○委員　でも、それがうまくいったら、それを違う小中学校にも広げていくことはできるんですか。そういう地域の方がいて、学校が開かれていれば……。

○委員　教育委員会が動かなければだめでしょうね。

○委員　そういうことなんですか。

○委員　もちろんワンポイントではいいんですよ。総合的にやるとなると、教育委員会が動かなきゃだめでしょう。だから、全部やらなくても、草の根でやっていけばいいんですよ。多分教育委員会へ言ったらば、行政はまた構えちゃうから、かえって……。

○委員　じゃ、聞いて、いいなと思ったら、個別な……。

○委員　そうしたほうが広がると思います。構えちゃうと、行政はかえって駄目なんですよ。

○委員　総合って、結構幅広く捉えられますから。

○委員　ある意味では、尾山台中でやった１つの例を。

○議長　小中両方ですね。

○委員　例えば４ブロック周辺で少し膨らませていくとか。一度にばっとやってしまうと……。

○委員　いい企画を探している方もたくさんいらっしゃると思うので、そういう情報が入ればいろいろやってみて、自然に広がるかもしれないです。

○委員　いいな、いいな、あそこは特別だみたいな。

○委員　区域の中に大学があるというのは非常にうらやましいです。

○委員　学区域ではないんですけれども、うちも駅向こうに日大があるんです。お祭りのときに一緒に協力してくれるというのはあっても、小学校、中学校とというのはなかなか……。

○委員　大学は大き過ぎるんですか。

○委員　何でですかね。

○委員　うちは小学校で日大の先生が数学のお勉強、土曜教室というのをやってくれていた。勉強を教えてもらうとか、子どもたちが日大に行って、理科の科学実験とかを夏休みにやってくれたり、うちのそばに文理学部があるんですけれども、どちらかというと、教科教育の補強みたいなイメージがすごくあった。

○委員　専攻科目も関係がありますか。先生のところは都市デザインとか、そういう形でいらっしゃるから、商学部とはまた違うかもしれない。

○議長　専門的な話というわけでもないんですけれども、社会イノベーションみたいなことで学校の課題を解決しようとして、最初は学校の中だけで解決しようとするのがこれまでの普通なんですけれども、オープンイノベーションということで、そのうち学校の課題を解決するのに地域の力を借りようとか、学校の外にあるものを使って解決しようというのがオープンイノベーションと言われている。ただ、それには限界があるのは既に分かっていて、それはオープンイノベーション1.0という状態なんですね。自分のために他者の力を使う。だけれども、そうやって使われるほうはあまり得がないし、新しいことは起こら

なくて、今ヨーロッパとかではオープンイノベーション2.0というのが必要で、学校、大学と地域だったら、学校のためだけでもない、地域のためだけでもない、大学のためだけでもない、みんなのフィールドの間に新しい価値をつくるという考え方が大事になりますよという考え方なんです。

だから、言われて思ったんですけれども、おやまちプロジェクトというのは、おやまちプロジェクトだけでも総合の時間はできないし、もちろん大学だけでもできないし、中学だけでもできない。大学にとっても学生の経験になるとかという価値があるし、商店街にとっても地元の中学生がその地域に関わってくるというメリットもあるし、みんなが得している構造なんだと思うんです。ちょっとややこしく、複雑、専門的になっちゃうかもしれないけれども、そういう構造がないと、多分逆に言うといい連携は生まれないのかもしれないです。

○委員　かつて十四、五年前かな。大学と世田谷区との連携協定みたいなのがありましたよね。区内の大学とそういう連携しましょうという調印までやったんですよね。今はもうないのかな。区内には大学が８つぐらいあるでしょう。もっとあるのかな。

○委員　もう少しあるかもしれません。

○委員　元教育長のときに私もその委員会に出たことがあるんだけれども、連携しましょうということで調印までやったんですよ。大学も担当者が決まっていて、教育委員会として、どこの大学かは分からないけれども、例えば駒澤大学とか、国士舘とか、そういう教育系の学部があるところは学生を派遣してやりましょうと。

○委員　地域貢献活動の評価委員をしているんですけれども、日体大さんも学生さんを区の小学校とかにイベントのときに派遣したりとか、それはボランティア活動……。

○委員　一時それが単位になるとかとなって、学生にとっては非常にメリットが大きかったんですけれども、今は立ち消えになっているのか、あまり聞かないから。

○委員　大分減っています。やっぱりコロナになったこともあって。

○委員　でも、やっていたときはどうだったんですか。

○委員　もうちょっとうまくマッチングができれば、ボランティアをやりたいという学生さんはたくさんいて、こういうことで学生さんを派遣してくれませんかという要望もあったんですけれども、学生さんも自分の勉強、部活の時間があったり、時間的なマッチングがうまくいかないという課題はありました。

○委員　さっきの話であれだけれども、そういう意味では大学、高校も含めて、やっぱり

地域の大きなエレメントですよね。

○委員　大学の方は、寮だったり、下宿だったり、大学の近くにお住まいの方がたくさんいらっしゃいますものね。

○委員　農大と近隣の自治会とか、学校とか、そういうところが連携していたりとかはあります。災害があったときには相撲部屋とかラグビー部かな。口頭ですけれども、そんな話はあって、訓練のときなんかには応援に来てくれると。ただ、学生さんは試験とかがあるので、それがうまく合わないとなかなか参加は望めないです。

○委員　園芸高校の学生が学校の花壇のお花を植えに来たり、そういう話がありました。それも地域なんですね。

○委員　特に高校は地域と接点を持つようにということで、地域ボランティアみたいなことは課題、授業というような形で……。

○委員　高校生はそうですよね。

○委員　今は授業になっていますから、そういうところの活用はできる気がします。かえって中学生のほうが忙しいのかもしれない。

○委員　部活があるからね。

○委員　部活があって、もうほとんど土日もなく、塾もあって、試合があって……。

○委員　そうしてみると、高校も大学も地域の資源ですね。

○委員　確かにそうですね。かえって高校への働きかけもいいのかもしれない。

○議長　私の完全な思いつきというか、これは大事なのかなと思ったのは、さっきの話。オープンイノベーションとか言ってしまうと難しそうに見えちゃうんですけれども、学校の課題を地域が解決するわけではなく、地域の課題を学校が解決するわけでもなく、学校の役割とか地域の役割とかの組替えが起こる。出会うことによって学校がこれまでになかった役割を果たすことができたりとか、地域のこれまでの関わりとかではなく、これまで見えていなかった地域の資源が学校に入ることによって、これまでにできなかったことができるみたいな役割の組替えみたいなことが起こるか、起こらないかというのは結構大事なポイントなのかな。それが起こる前提として、ベースとなるソーシャルキャピタルとか言ってしまうとちょっと堅いんですけれども、関係性がちゃんとあって、そうであるからこそ役割の組替えが起こって、関係性を――何て言ったらいいのかな。

○委員　1.0というのは現在ということなんですか。それを２倍にするという意味の指標ですか、この1.0、2.0というのは。

○議長　1.0、2.0というのは、数というよりも、バージョン１、バージョン２みたいな感じです。第１ステージ、第２ステージみたいな発展系という意味なので、オープンイノベーション１は自分のためにほかの力を借りる、２は、すごく分かりやすく言うと、社会のためにいろいろな人が協力するという感じです。

○委員　さっきおっしゃいましたけれども、ウィン・ウィンとも違いますね。

○議長　だから、ウィン・ウィンじゃなくていいんじゃないのというのは、多分そういうことかな。

○委員　結果としてウィン・ウィンには見えますけれども、そこを目指してはいないというか。

○議長　そのためには新しい人が絶えず入ってくるというか、ずっと同じ人たちでやっていても多分こうならなくて。

○委員　それがイノベーションになるわけですね。

○議長　そうです。

○委員　自助、共助の共助とも違う。例えば今の尾山台の地区を例に取ると、指標2.0までいっているというふうな見解でいいんですか。

○議長　どう評価するかというのはなかなか難しいのかもしれないですけれども、私の感覚からすると1.0ではないな。中学校の授業をよくするためにみんなで頑張って何かをつくっている感じはなくて、それぞれの事業者が持っているものを生かしながら、その人もそれまでにない価値を得ている。資源を持ち寄ることによって、お互いにいい思いができるけれども、自分のところだけで囲い込んじゃうと、なかなかそうならない。

○委員　新しい人は、この中の所属者でいいわけですか。それとも外部から入ってきた触媒になる人という意味……。

○議長　中の人が発見されることもあると思いますけれども、今回の場合はコーポラティブマンションを建てている人がいたというのが我々にとっても新しいし、学校にとっても新しい。マンションの事業者も自分たちが持っている資源がまさか中学校の授業で使えるとは思っていないわけです。だから、彼らにとっても自分が持っている資源が再定義されて、ほかの人に生かしてもらえることで自分たちも得をするという。

○委員　そういう意味では触発する、触媒になる人が入ることによって、その指標も上がってくるということですね。

○議長　そうですね。

○委員　自分のところをよくしようという思いからスタートしているような気がします。よって、うちがよくなるために力を貸してくださいよと先生のところに来たり、先生は先生でお持ちになっているものを出してやっていると、うまく回り出すというか……。

○議長　そうか、そうか。確かに今回の事例として振り返ると、実は中学校からおやまちプロジェクトに協力してくださいとまず来たんですね。地域学習を充実させたいからと。一方、マンションからは、こういうマンションを尾山台で造るので、住民向けに地域を紹介したいので、おやまちプロジェクトに協力してくださいと来た。だから、それぞれ答えてもよかったんだけれども、これは一緒にやったほうがいいんじゃないのということで、引き合わせて構図をつくったんです。だから、その時点で頑張って我々が、じゃ、いい授業をつくろうとか、いいマンションにするためにこういう資源を渡そうと思っちゃうと、そこで終わっちゃうんだけれども、あまり真面目にそれに答えないで、ほかの人にやらせようみたいに思ったのが結果的にみんなによかったのかもしれないですね。

○委員　やっぱり人なんだね。

○議長　さて、どうしましょうか。

○委員　ゴールは見えているんでしょうか。

○議長　ゴールが見えているのか、見えていないのかは分かりませんが、一応時間なので。

○委員　少しずつ見えてきた気はする。

○議長　私にとっては、ああ、そういうことかみたいに……。

○委員　何とかならないかなというのが集まってこないと回らないということですよね。

○議長　そうです、そうです。だから、それが前提ですよ。動いているというか、持ち込まれるとか。

○委員　それがないと生まれない。

○委員　そうですね。自分のところだけで何とかしようというのは無理ですものね。

○委員　いや、別に今のままでいいやというのがあると回っていかないし。

○委員　そうなると、やっぱりオープンイノベーションにはならないんですよね。

○委員　ならないですね。そういう条件を入れないとね。

○委員　だから、条件と環境が違うから、必ずしも尾山台のができるとは限らないし。そうすると、結局その最大公約数は何かというと、やっぱり人になってくるわけですよ。

○委員　そういう意味では、例えば自分が学校のために何か手伝いたいとかというよりも、自分の住んでいる地域がよくなってほしいし、自分がここで心地よくなりたいからという

ことが結局は人とつながり、学校とつながり、結果的にそれで回っていくみたいなことなんでしょうか。

○議長　なるほど。

○委員　それが結局モチベーションになるんですよ。結果がある程度出ないと意欲につながらないから。

○委員　自分が楽しいとか、自分がうれしいということは、やっぱり周りもうれしくなって、そうやってつながっていく。

○委員　子どもたちの笑顔とか。

○委員　そうそう。だって、地域に子どもの笑顔がある、子どもの笑い声があるのは大事なことで。それで元気をもらえますから、学校は存在しているだけで十分意義はありますね。

○委員　地域の人たちにとっては子どもたちの笑顔が御褒美ですよね。

〔学校グループ〕

○副議長　振り返りの資料を見ながら、学校グループは資料２－３ですね。学校グループは前回、なぜ連携・協働するのかとか、連携・協働のメリットというようなところで話合いを進めてきて、その中では顔見知りができることによって、防犯上、安心安全が生まれるとか、災害時に避難所になるというようなところから、顔見知りができるというのが学校と協働する一番のメリットだねという話が出てきました。

ただ、ウィン・ウィンの関係というのがなかなか難しいんではないか。それを妨げているのは学校の先生方の忙しさとかにあるんじゃないかというような話がありました。学校から見た地域の教育力といったときも、例えば先ほどあったように、小学校はもうウエルカムだという一方で、中学校は、というお話がありましたので、ウィン・ウィンの関係になるためにはというところと、顔見知りをより広げるためにはどうしたらいいか、今後どういうことをしていけば具体的にそうなるかを話し合っていければなと思っています。

小学校と中学校との連携ということでいえばどのように思われるか。まず、ちょっとお伺いできればと思うんですけれども。

○委員　小学校と中学校の連携は、世田谷区は学び舎ということで進めておりますので、そんな中で、例えば小学校から中学校へ上がったときスムーズにいけるように、中学校のお兄さん、お姉さんが運動会にボランティアでお手伝いに来てくれたりとか、小学生が中

学校の正門に行って挨拶運動に参加したり、部活の紹介みたいなのも６年生は行ったりしていますね。子ども同士はそんな連携をしていますけれども。

○副議長　地域と小学校、地域と中学校。距離感としてはどうですか。地域の方々から見て。

○委員　地域の人たちはそんなに距離感は違っていないと思いますが、小学校の親はまだ中学校は知らない、逆に中学校の親は小学校をもう卒業していますから、そんなに違和感はないというところでしょうか。

○委員　小学校、中学校という話がありましたけれども、そんなに中学校とかを意識しなくても、地域で学校というと、まず小学校なので、学区域は中学校のほうが広くて、小学校２校に対して１校しかないから遠いわけです。家が近い人もいるけれども、やっぱり地域の学校というのは小学校だから、それに対して、じゃ、中学校もと別にしゃしゃり出なくても、ある程度中学校は距離感がある。

○副議長　物理的な距離感ですね。

○委員　保護者も小学校へはいっぱい行くけれども、中学生になるとあまり中学校へ行かなくなるわけです。そうすると、保護者からも距離感があるから、中学校と地域というのは大人の関係でいいんじゃないかな。今ここで協調とか連携というので考えるのでは、小学校のことだけでいいんじゃないかなと僕は思います。

　じゃ、小学校と中学校はどうかというのも、今は学び舎とかいう感じで、世田谷区の施策でもある程度いい関係では、小学校を前面に出して、中学校から関係するよといういい関係ができていると思うので、今の感じはいいじゃないかなと思います。

○副議長　今、お話を伺っていて、小学校は確かに小学校区で、学び舎というのは１つの中学校に３つぐらい小学校がぶら下がっていますよね。そういう意味では、物理的なところから小学校との連携の仕方と中学校との連携の仕方は違うんじゃないかということですね。なるほど。そういう意味では、校長先生は、小学校の校長として見たときに、やはり距離感が近いというのは感じられますか。中学校の校長さんに比べて。

○委員　そうかもしれないです。やっぱり物理的な広さみたいなものももちろんありますし、先ほどお話にあったように保護者が学校に行く機会というのは小学校と中学校で大きく違うと思います。小学校は１年生から６年生まで幅があるので、下の学年の保護者はすごく学校に来たがるけれども、だんだん学年が上がっていくに従って、保護者会とかもあまり来なくなるようなところもあるので、より子どもが小さいうちのほうが保護者はすご

く関わりたがってくださる。学校にとってみれば保護者が一番身近な地域の方となりますから、そういった意味で小学校と中学校という子どもの発達段階の違いによって関わり方が違うのは当然なのかなとは思います。

○副議長　そういう意味では、このグループというか、小学校との連携というのは非常に重要になってくるわけですけれども、その中で先ほどのおやまちプロジェクトもありましたけれども、裾野を広げるためにはどのような取組が必要かについて伺っていきたいと思うんです。例えば学校で何かするにしても、多分いろいろと地域学習とか、そういうものを考えるにしても、何かきっかけがないと難しいわけですよ。そうしたときに誰がキーパーソンになるべきかというところなんです。学校運営委員会の委員なのか……。

○委員　すみません。前回、私はこちらのグループじゃなかったので。私は今、学校支援コーディネーターをしております。もちろんゲストティーチャー。自分が卒業生なので、小学校はもう140周年ですから、自分がいた100周年だったときの話をしたりとか、古くからというか、自分が小学校卒業生なので、もう50年以上、地域に住んでいるので、いろいろな地域の方を存じ上げていますから、こういうことをやりたいというときにお願いに上がるというか、それが学校支援コーディネーターの役割の一つ。あとは学校運営委員会。小学校は学校運営委員じゃないんですけれども、学校運営委員会主催で漢字検定を行ったりとか、そのような協力。そうすると、地域の方にも試験監督をお願いしたりしています。中学校もこのたび英検をやってみたんですけれども、ＰＴＡと協働でやるんですけれども、そのほかにお子さんが卒業しちゃった地域のお母さん、元ＰＴＡの役員たちに声をかけたりしてお手伝いしていただくということで協力ができているかなと思っています。

　先ほどのウィン・ウィンの関係というところでは、直接中学生から地域の人が何かメリットということはあまり考えていないですけれども、いざというとき、避難所のときは、やっぱり高校生はみんな遠くに電車で通っているので、地元の中学校の子たちは力になってくれるんじゃないかなというのは、避難所運営の委員をやったときにすごく感じました。力もあるし、判断力とか行動力も小学生とは桁違いですから、そういう意味で、お互い地域に根差した活動をしていくことで、いざというときに力になってもらえればいいんじゃないかなと感じています。

○副議長　そういう意味では、学校支援コーディネーターというのは非常に重要な役割を担っているんでしょうか。

○委員　そうですね。

○副議長　例えば地域学習をするときは、学校から見て、まず学校支援コーディネーターさんに相談するんでしょうか。

○委員　私は着任してまだ２年目なんですけれども、本校は学校支援コーディネーターのシステムがまだ軌道に乗っていなかったんです。そもそも学校支援コーディネーターはこういう仕事だから、これをお願いしますよとかいうことを去年ぐらいからようやく始めたんですけれども、やっと少しずつ軌道に乗ってきたのは、１つの例で言うと、２年生がまち探検をやる。いろいろな商店なり、施設なりと関わっていかなきゃいけないというときに、学校支援コーディネーターの方に間に入っていただいたり、グループに分かれて見学に行ったりするときに、そのグループの子、引率のお手伝いで保護者を頼んだときに、この保護者を束ねてこのようにやってくださいと説明するのを支援コーディネーターの方にお願いしたりというような形で、ちょっとずつやっているところです。それがもっともっと機能してくるようになれば、学校の年間の計画というのは４月に出ていて、大体同じことを毎年繰り返してやっているので、コーディネーターさんのほうから、そろそろこの時期なので、これをやっておきますねみたいな形になってくるかなと思います。

　ただ、これはどちらかというと、教員の負担軽減になるというところで、学校はとてもありがたいところではあるんですけれども、そういった活動の中で、私、当初からすごく心苦しいところなんだけれども、じゃ、学校は地域のために一体何ができているのかなというのがすごく思っちゃうところです。

○副議長　なるほど。学校にとっては地域の存在はすごいありがたい一方で、地域が学校に望むこと……。

○委員　それほど意識しなくてもいいんじゃないかな。学校は存在そのものが地域の役に立っているので、学校評価アンケートなんかが回ってくるけれども、地域のために学校は何をしているとか、校長は地域のためにとかあるけれども、そんなに意識してくれなくても。保護者とか地域としては、先生は子どもたちのほうを向いてやってくれればいいんだよと。地域がどうのこうのと、こちらに気を使わなくてもいいんだよというのだから、地域と学校の連携を担っているのはＰＴＡと学校運営委員と外部から手伝っているコーディネーターとか、そういう人たちに任せればいいので。校長は学校の顔としてある程度こちらに向かないといけないと思うけれども、先生たちは子どもに向いていてくれれば十分かなと。

○委員　よく言っていただけるのは、本当にありがとうございますとお礼を申し上げたり、

学校はやっていただくばかりで申し訳ありませんとかという話をすると、いや、子どもたちの元気な姿を見られるだけでいいんだよと言っていただけるところもあったりするので、地域との連携で考えると、学校はその地域の子どもたちを預かっているわけですから、子どもたちの教育に全力で携わっていくことが地域への貢献になるのかなと最近考え始めているところです。

○委員　それが重要と思います。

○委員　エポックメーキングのように地域に対して何かをしましょうとかというよりも、本当に地道に子どもをしっかり育てることが地域連携になるのかな。最近そんなことを思っていますけれども……。

○副議長　そういう意味では名言ですね。「存在そのものが」というのは。

○委員　存在そのものというのは学校という名前だけはなくて……。前のグループでも言ったんだけれども、体育館とか、グラウンドとかという絶対的な箱物を持っている。そうすると、地域の人はグラウンドを貸してよとか、多目的室を貸してよとか、それに、いいよ、どうぞと言うだけで地域の人は非常に助かるので、それだけで十分のような気がする。

○委員　そこは大きいです。校長先生によってはあまり貸したがらない方もいらっしゃるんですね。それはよく分かります。外部の人が入ってくることに対するいろいろなことがあったので分かるんですけれども、そこのグラウンドを借りたりとか体育館をお借りして、地域のことができることについては大変ありがたいな。

　私はもう少し要求があるんですけれども、要はその地域の子どもを育てるという意味では、お母さんたちも働いている方が多くて、家庭教育が難しくなってきています。だから、学校の中で学校教育。勉強もそうだけれども、社会教育的なことを私はこれからしっかり担っていってほしいな。要は学校での挨拶以外、世田谷は、思いやりとか、感謝とか、いろいろやっているじゃないですか。あれを身につけられるような子どもを育ててほしいなというのが学校に対する一番の願い。家庭ではなかなか難しくなってきていると思うんですよ。なので、もし地域のためにと言っていただけるのであれば、世田谷はそういう子どもを育てますよというところで、もちろん地域と協力して、家庭と協力して。勉強が都内で何位だとか、そういうことだけじゃなくて、やっぱり世田谷、自分の住んでいるまちが好きだとか、どこどこの商店さんにクラスみんなで……。例えば私がゲストティーチャーをやったときに、最後のほうで発表会があって、その後、クラスの子たちみんながありが

とうのお手紙を書いてくれたんですね。それが何よりうれしいというか、子どもたちの心を育てるような。担任の先生がきっとそのように言ってくれたんだろうけれども、１人１人みんな違うことを書いてあったりとか、それを地域の人、大人は喜ぶわけですし、子どもたちもそうやって関係ができて、あのときのおばちゃんだみたいなものができるので。そうすると、こちらも、何かしていたら、気をつけてねとかと声をかけやすいわけですよ。そうやって広げていけたらいいんじゃないかなというところです。

○副議長　そういう意味では、じゃ、学校が地道にそういう教育を行い、そのことによって地域の人もその姿を見て安心し、地域の方が学校教育活動の一環で関わることで顔見知りも増える。それゆえ、やっぱり学校支援コーディネーターの位置づけは大きいんでしょうね。

○委員　それだけではないです。

○委員　それだけではないと思うんですけれども。

○副議長　それを中心にいろいろな顔見知りを広げていくと。

○委員　もちろんＰＴＡも、学校運営委員も、学校協議会メンバーも、卒業したＰＴＡのＯＢ、ＯＧたちもそうなんですけれども、知らない人に何をしろということはないんですけれども、学校に来てくれているような人たちとは、お互い安心してやっていけたら、まちづくりにはいいんじゃないかなと思います。

○委員　１つ思うのは、今のお話をずっと伺っていて、ああ、なるほどなと思ったのが先ほどの話に戻ってしまうんですけれども、学校は本来ある教育をしっかりやっていくことが地域貢献になっていくんだな。教育ということを考えたときに、その地域の特性の中で求められている子どもの姿。例えば社会性とか、そういったものについての教育もきちんと整備して、例えば道徳とかというだけではなくて、この地域のこの子たちだから、こういう社会性を特に伸ばしていかなきゃいけないなというところにも目を向けてやっていくことが大事なのかなとすごく思いました。プラス、コーディネーターさんとか、学校運営委員とか、ＰＴＡとか、いろいろな地域の方々とフランクに思いを伝え合っていくことで、今何が求められているのかとか、今自分たちが何をしているのかという情報をきちんと伝え合うことができれば、それがウィン・ウィンの関係につながっていくのかなとは思いました。

○副議長　地域の教育力というか、先ほどは家庭教育のところが、働き方もあるんだと思いますけれども、今ちょっと物足りなくなっている中で、学校は学校で頑張る。じゃ、今

度、地域はといったときに、何か見込まれている活動とかはあるんでしょうか。お祭りとかも立派なあれだと思うんですけれども。

○委員　お祭りもありますし、町会の運動会とか。

○委員　今年はないんですけれども、盆踊りとか。

○委員　なかったけれども、世田谷区は町会がしっかりあるので。

○副議長　町会という存在も大きいですよね。

○委員　ただ、若い御家庭は町会に加入しなくなっているので。でも、お祭り。学校の隣に神社があるんですけれども、地域のことでそこのお祭りの話をしてほしいと言われて、ちゃんとおみこしも持ってきてくれて、はっぴを着てきてくれて、神社の歴史から話してくれるわけですよ。やっぱりそれは町会がやってくれているし、盆踊りだって親子みんなで行くのに町会に入らないというのは何なのと私は思うんです。

○委員　難しいですね。

○委員　そこをＰＲすると同時に、保護者の意識とか、そういうものも……。

○委員　今のお話ですごく思ったのは、保護者の意識はすごく大きいなと思いました。まさに今のはその現象で、町会がイベントなりなんなり、いろいろなことをやってくれている、子どもはそこに行って楽しむ。でも、保護者は町会には関わらない、町会の高齢化が進んでいくみたいな。何かすごく難しいなと。

○委員　そこは課題ですけれども、地域というんだったら、やっぱりそこは避けて通れない。私なんかも回覧板の当番をしていますから。

○副議長　でも、そういう意味では、地域の今いる方々。町会に入って活躍されている方は、保護者の意識を変えるだけでもかなり大きいですよね。回覧板を持っていくとか、お祭りとか、町会はそういうものをやっているんだよと。それを分かっていない保護者の方もいっぱいいますものね。

○委員　ちょっと話がずれちゃうかもしれないんですけれども、ＰＴＡも今はもう完全に任意という形になったので、毎年退会したい人の希望も取らなきゃいけないし、小学校に入って１年生には入会希望から取らなきゃいけない。実際に今年なんかの１年生も、最初は入りませんという家庭が相当数あったんです。ＰＴＡ会長が全部に電話しまくって、結局ほとんど入って、今うちの学校はもう99.何％です。ほんの数人入っていない御家庭があるんですけれども、１割ぐらい入っていないような学校もあるみたいなので、ＰＴＡの運営自体も苦しくなっている。それと同じ現象なのかな。やることはやってもらうんだけれ

ども、自分は別に手は出しませんみたいなというのが増えてきているのかなと。

もう１個、これもまたずれてしまうかもしれないんですけれども、世田谷はすごく広いから、地域によっても随分違うのかな。僕は、以前お話ししたように、それこそ烏山神社のお祭りにも行きましたし、旧甲州街道ところでおみこしを担いで、中町、上町、下町をぐるっと回って。なので、あの辺の地域はそれがすごくあるなというのも感じていますけれども。

○委員　地域性もあります。

○委員　区内にはそうじゃない地域もあるだろうな。

○委員　何が言いたいかというと、私は子どものうちからそういう地域の自治に関わるような。なぜかといえば、私、小学校の先生にそれを教わったんです。多分小学校５、６年の先生が自分たちでいろいろやっていくことを教えてくださったおかげで、ついついＰＴＡとかに打ち込んじゃったんですけれども、主体的に行動しようというのを小学校で教わったんですよ。だから、今は何でも受け身になっているから、そこを学校教育の中でしてくれることが、将来、自分たちのまちのことには自分たちも参画しましょうというのを中学、高校になってから言われてもなかなかできないと思うんですよ。

○委員　これは全然余談になっちゃうんですけれども、僕は今、自分の学校の子どもにも、職員にも同じことを言っているんです。それはなぜかというと、自己実現を図るためには与えられたものではできないよ。自分から集団なり社会なりに貢献していかなかったら自己肯定感なんか高まらないし、自己実現を図ることにもならないよみたいな話はしているんです。そういったものに主体的に関わっていく大人が増えていくと、関係性も深まるのかなと思います。

○委員　学校と地域というところで、今の親世代はなるべく余計なことには関わらないほうがいいよという世代――やむを得ないと思うんですよ。生きてきた社会の中での。私たちみたいに、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に暮らしたりとか、そうやっていく時代と20年若い人たちは全然物の考え方が違う。やらなくていいことはなるべくやめておきましょう、自分のことを大事にしましょうという世代だからしようがない。そういう親に育てられた子どもたちがそれをまねしていると一緒になっちゃうので、いや、いや、そうじゃないんだよということを教育の中で……。親は、いいよ、やめておきなさいよと言うんですよ。手を挙げろとは言うけれども、何かに立候補すると、やめておきなさいよとかと言っちゃう世代なので、そうじゃないよということを言ったことで……。私たちはなるべく人

のためにやったほうがいいよと言われていたから、こんなふうになっちゃったんですよね。みんながやりたがらないこともなるべくやりましょうと言われて育った世代はこうなるけれども、人が嫌がっているんだったら、あんたもやめておきなさいよという親に言われた世代は、おうちに帰って、やったと言っても、よくやったねとは褒められないんですよ。子どもは、お父さん、お母さんに褒められたほうがうれしいに決まっているでしょう。だから、そこを少し変えていかないと。

○委員　学級委員長とかなったら、今は褒められないの……。

○委員　褒める親と褒めない親。だって、勉強ができる時間がなくなっちゃうでしょう。

○委員　本当にいろいろです。受験の報告書に書くためには委員長を引き受けろみたいなことを言われちゃううちもあるし、すごく打算的なというか。

○委員　そこですかという感じですよね。時代が違うから。でも、社会の時代だからしようがない。その中で、学校と地域で将来を見据えて育てていかなきゃいけない。

○委員　自分の子どもの頃を思い返してみると、これが地域ということにつながるのかなと思ったんですけれども、僕のうちは母親だけで育ったんですけれども、非常に厳しい人だったんです。よく言っていたのが人様に迷惑をかけるな、人様のためになることをしろと。人様というのが、つまり地域なのかなという気がするんですよ。要するに自分の周りにいる人々。つまり地域に迷惑をかけるんじゃないぞとか、地域のために働けよという昭和の時代の教えと、今の平成末、令和の時代の教えは違ってきているのかな。その辺で、先ほどの話に戻ると、保護者の意識というものが変わってくると、地域と学校の連携はすごくスムーズにいくのかなという気がします。

○副議長　よそ様と言ったときは、自分以外の他人に対する興味や関心が前提になっていると思うんですよ。だから、そこがないと本当はいけないのかな。なぜかというと、何でも自分で完結しているような感じの意識が……。

○委員　完結できちゃうと思い込んでいるのかもしれないね。

○副議長　思い込んでいるんでしょうね。

○委員　社会の中で生きていくんだから、実は完結できるはずがないんですよね。

○副議長　その意識を変えるという意味でも、地域のいろいろな行事、お祭り一つをとっても……。もちろん学校教育も。

○委員　だから、それを関連づけてあげることが大事。みんなが楽しくやっているお祭りは、じゃ、誰がやってくれているのって。そこに持っていかないと、楽しかったとかどう

だっただけで終わってしまっちゃ駄目だけれども、多分それは親は言わないですよね。
○副議長　分からないですものね。
○委員　町会の人たちが準備してやってくれているんだよ、ありがたいねなんて言う親は、30代ぐらいじゃいないよね。一緒に行って、縁日を楽しんで帰ってきましたよという感じで。おじいちゃん、おばあちゃんぐらいがそういう感じで言うかもしれないけれども。
○委員　先ほどちらっと冒頭部分でお話ししたんですけれども、今、うちのＰＴＡさんはすごくいろいろなことをよくやってくれているというときに、子どもにもその楽しそうな姿を見せてくれているんです。自分たち自身が楽しむ姿を見せてくれているし、こういうことが行われるためにはこういう人とこういう人が頑張っているんだよみたいな話も必ずしてくれているので、そういった意味では、非常に小さいコミュニティーですけれども、うちの学校の中では保護者がすごく頑張ってくれているのかな、そういうものが地域との連携つながるんだろうなと思うんです。
○委員　例えばＰＴＡだよりとかで発信してもらえれば、町会で何々がありましたみたいなこととか、学校は町会のＰＲはできないけれども、ＰＴＡは地域の人だからできるんですよ。学校だよりには書けないけれども、ＰＴＡだよりには地域の町会の誰々さんが来て、何の話をしてくれましたねとか、こういうイベントがありました、みんな楽しかったようですとか、そういう連携を地域とＰＴＡがやってほしいなと私は思うんです。自分が現役のところは気がつかなかったけれども、今になったら……。
○委員　確かにＰＴＡはそれができます。
○委員　学校はできないけれども、ＰＴＡはやってもいいんじゃないかと。町会の会員の人なんかはいっぱいいるわけですよ。お店の人なんかもそうだし。
○委員　商店会ね。なかなか一商店の宣伝はできないけれども、商店街の宣伝はしてもいいと思うんだよね。
○副議長　そういう意味では、学校と地域を結ぶもの。もちろん支援コーディネーターもいるけれども、ＰＴＡの存在は結構大きいですよね。
○委員　ＰＴＡの存在は大きいですよ。
○委員　めちゃくちゃ大きいです。
○委員　結局地域と結びつけるのはＰＴＡ。我々も地域の人になっているけれども、みんなＰＴＡのＯＢなんだよ。
○委員　実際そうなんですよ。

○委員　昔からその地域に住んでいらっしゃる方なんて、現役のＰＴＡの方のお父さん、お母さんが元ＰＴＡをやっていたりするんですよね。

○委員　そうなんだよ。町会長とかに聞くと、ＰＴＡ会長だったんですかみたいな。大体そうだね。10年後の自分かもしれないんだけれども。

○委員　そんな感じになるんでしょうね。ＰＴＡはそうやって地域に関わっていくというきっかけなので、あまり嫌がらずに……。

○委員　学校もＰＴＡのＴなんですけれども、要するに保護者がいろいろ学校とすごく深く連携していろいろなことをやっていると、さっきもお話ししたんですけれども、この人たちが地域の人として、きっとその後も、ＯＢ、ＯＧになっても学校に関わってくださるんじゃないかなという期待は大きく持てるので。でも、実際問題そうですよね。

○委員　そういう方たちはたくさんいます。青少年委員さんもそうだし。

○委員　青少年委員もそうだし、地区委員もみんな結局はＯＢ……。

○委員　先ほどの地域と学校との連携をさらに深めて、協働体制を強くしてということで言うと、さっきの学校の役割としては教育をしっかりしていくんだということプラス、現在の保護者としっかり連携していくんだということも大事ですよね。いきなりぽんと飛んで地域に目を向けなくても、目の前の保護者ということですよね。

○副議長　そういう意味では、ＰＴＡのＯＢ、ＯＧ、昔は元保護者、今は地域住民という方とのつながりをつないでいるのがＰＴＡなんですよね。そのＯＢ、ＯＧの方が支援コーディネーターとか、青少年委員とかとなっているわけだから、ＰＴＡというのはある意味人材バンクみたいな存在。

○委員　ＰＴＡと言うよりは保護者と言ったほうがいいのかもしれませんね。

○副議長　Ｔが入っちゃいますけれどもね。

○委員　ＰＴＡをやっていて思うのは、先生方とのコミュニケーションが、私たちの頃は、今からもう20年近く、15年とか前ですけれども、もうちょっとあったんですよね。今は働き方改革で、そこがすとんとなっちゃうところと、学校によっては学校運営委員会に先生方も出てくださったりするんだけれども、なかなかお会いする機会がなかったりするので。でも、そこは人間同士なので、先生にいつもありがとうございますなんて言われると、いえ、いえ、こちらこそお世話になっています、うちの息子が悪さをしてみたいな感じになるので、何ができるかじゃないんですよ。人間関係をうまく構築していくことで、もっと協力しようという気になるから、物質的なことではなく、精神的なことというか、それで

ウィン・ウィンでいいんじゃないですかというところですね。

○委員　今のうちの会長さんは今年から、去年は副会長さんで、すごくよくやってくださる方なんですけれども、私に言っていただくのは先生たちがすごく気軽に話をしてくれるようになりましたと。それだけでいいんです。まさに同じことをおっしゃっていて、それがあれば協力しようという気にもなるでしょうし、またやろうという気にもなるのかな。だから、本当に日頃からの関係性というか、本当に挨拶一つで大きく違ってくるんじゃないかな。ここはすごく大きな話になっちゃって、挨拶まで行っちゃうと本当にコミュニケーションのベースになっちゃうんです。

○副議長　でも、声がけってすごい大切ですよね。一時期私が違うある中学校で言ったのは、挨拶、挨拶と子どもたちに言わないで、先生が一番挨拶ができていないと。

○委員　そうなんです。本当に。

○副議長　でも、最近は全然変わってきたような感じがします。学校の先生方から、こんにちはとか、いつもありがとうございますと。それだけでもそうですよね。この人、何だろうみたいな先生が昔は結構いましたよね。

○委員　ありました。いましたよ。

○副議長　まるで存在していないかのようにすれ違っていく先生がいましたものね。

○委員　だって、漢字検定の受付を朝の登校時にやっているのに、すっと通っていく先生とかがいて。この学校の生徒のためにやっているんだけれどもなという感じを受けましたよ。

○委員　だから、そこで、おはようございます、ありがとうございますという一言が出るか、出ないかですね。

○副議長　だから、先生方の声掛けとおっしゃいましたけれども、挨拶も含めてですよね。

○委員　挨拶からですよね。

○委員　もしかしたら、本当に地域と学校のそういう連携というものは、やっぱり１人１人の先生方にもあるのかもしれないから、そこは学校の管理職の方たちがうまいこと……。

○委員　本当にそう思っています。

○副議長　でも、かなりキーワードは出ましたね。改めてＰＴＡの存在意義も再確認できたし。

○委員　でも、あまりＰＴＡと言うと嫌がられるから。

○委員　そうなんです。負担に感じちゃうと……。

○副議長　いい名前はないですか。

○委員　負担に感じちゃうと先細っていっちゃうというか。

○委員　どこがいけなかったのかな。

○委員　何で負担に感じるのかな。

○委員　中学校の連合会の会長だったんですよ。私は小学校の連合会の会長を。

○委員　ちょうど一緒だったんだっけ。

○委員　そう１年は。

○委員　無理をしちゃうところもあるのかもしれない。

○委員　めっちゃ忙しいからね。

○委員　その点、僕は、めっちゃ忙しかったんだけれども、嫌ではなかったな。

○委員　うちは、できるときに、できる人が、できることをというのを合い言葉にして、プラス、やるなら楽しくやりましょうと。だから、面白いイベントが結構いっぱい…。

○委員　ちょっと雑談になっちゃうけれども、そんなにやりたくない人には僕なんかはやらせなかったよ。

○委員　私もそう。いいですよと送り返しました。結構ですと。

○委員　結局あるあるだと思うんですけれども、よく報道とかでも出ているんですけれども、委員決めとか、ああいうのですごく苦しい思いをされて、そちらのほうばかりクローズアップしてメディアが流すじゃないですか。そうすると、入学してくる親なんかは、経験のない親は、最初からもう警戒しちゃうんですよ。嫌だ、嫌だ、面倒くさいって。

○委員　それぞれの学校によって、すごくきっちりやることを伝統的なように言っている学校もあったんですよ。それは確かにそうだった。だから、今できること、今に合わせて変えていったらいいと思いますね。もちろん古い人たちは何で変えちゃったのと言うかもしれないけれども。

○委員　そこに負けないことは大事ですよね。

○委員　大事。ただ、何でも楽すればいいというものじゃないからと私はいつも言っていますけれども、本当に大事なことがどこなのかは必ずちゃんと見てねと相談しています。

○委員　ＯＢの方とかも、うちのＰＴＡも、去年、今年で、コロナのこともあったので、すごくいろいろ変えているんですけれども、ＯＢの方々もきちんと話をすると分かってくださるんですよ。

○委員　それはそうですよ。

○委員　皆さんも本当に御苦労を重ねてやっていらっしゃった方々ばかりだから、こうこう、こういうことで今、こんな取組をしているんですよと言うと、ああ、なるほど、新たなこの取組も面白いわねとか言ってくれるので。

○委員　だから、やっぱり工夫、創造力、やらなければいけない単Ｐ研修会とか、いろいろやってくれるんだけれども、世田谷区はいっぱい決まり事があるんですよ。家庭教育学級とか。でも、それをどんな形で、どんなふうにうちの学校はできるかなというところでいいのに、優等生が多くて、ちゃんとやらなきゃいけないみたいな人たちが多いから。私みたいにずぼらな人が会長になると楽なんです。

○委員　何かをやるということは大変じゃないことはあり得ないんですよ。絶対大変なんですよ。忙しいし。大変なんだけれども、それを前向きにやって、楽しめれば、それが一番いいと思うので。

○委員　それが小学校のときの経験なんですよ。みんなが遊んでいる時間に班長会をやりました、みんなが遊んでるときにガリ版を刷って、学級だよりを作りました。でも、その経験がここに来ているんだなと何十年かたって分かったので。

○委員　でも、それは、やっぱり自分からということのすばらしさが分かっているからできることですよね。

○委員　先生が多分そういうクラスをつくったので、小学校の先生に感謝しています。

○副議長　伺っていると、保護者の意識というところがどうしてもいろいろな面で左右してきます。

○委員　さっきの町会とか家庭の関係もそうだし。

○副議長　ＰＴＡもそうだし。

○委員　ただ保護者がそこのよさを知らないだけということもあります。自分たちが経験していないということもあるので。

○委員　やってみたら楽しかったみたいなところも絶対あるんだろうな。

○委員　でも、今のお母さんたちは、できないことにいらつく感じのイメージがあるんじゃないかなと思います。私、ちゃんとできないからやりませんということでした。そうじゃないんですよ。

○委員　今の子もそうですけれども、失敗することを極度に恐れますよね。

○副議長　確かに。学生でもそうかもしれない。１つ１つ聞いてくるんですよ。

○委員　これ、合っている？　合っている？とか聞きますよね。

○副議長　叱らないし、あれだから、やってみなと。

○委員　やってみなというのがなかなか踏み切れないんですよ。

○副議長　これでいいですか、これでいいですかと。いや、大丈夫だから。

○委員　今、若い教員もみんなそうです。失敗できないと思うから。

○委員　そうです。そのように育ったんですよ。それは、私は、日本の教育のあるいっときの失敗じゃないけれども……。

○委員　試しにやってみなと。駄目だったら、その方法を捨てればいいでしょう、よかったら残せばいいんじゃないなんて言うだけれども、踏み切れない。

○副議長　そうですね。そろそろ卒論の提出なんですけれども、先生、これでいいですか、こんなものでいいんですかと。いや、もういいから、考えていることを全て書いていいよと。後からここがちょっとおかしいなとは言うんだけれども。

○委員　最初から完成版をつくりたがりますよね。

○委員　子どもを見ていても、そう思います。大学生なんかを見ていると。

○委員　だから、ちょっと失敗すると、もうぐしゃぐしゃとやっちゃったりする子が本当に多い。

○委員　小学生だってそうですよ。ＢＯＰに来ている学童が一々宿題を、これで合っている？　これで合っている？　と言うから、いや、大丈夫、間違えたらちゃんと覚えればいいんだからと言うんだけれども、嫌だと言うんですよ。

○委員　直せばいいんだから。

○委員　ちゃんと丸がつかないと嫌だと。

○委員　転びたくない子が多過ぎますね。

○委員　転ぶ子は少ないです。

○委員　親が転ばせないですからね。

○委員　そこです。

○副議長　完璧主義じゃないけれども。

○委員　やがて大けがをしないためには、小傷をいっぱいつくっておいたほうがいいんじゃないかと。

○副議長　チャレンジ精神が乏しいのかもしれません。何でこんなふうになっちゃったんでしょうか。

○委員　そこはちょっと分からないことがあると思う。

○副議長　正解なんてないのになと思うんですけれども。

○委員　学校教育がそのときそのときの大きな流れで、こうしましょう、こうしましょうとあまりにもやり過ぎていて。もっと広く構えていればよかったのに、そのときの学習指導要領はこれとか、方向性を定め過ぎるから。

○委員　だけれども、大人になってからは人間性が一番大事じゃないですか。

○委員　もっと大きく、この範囲をやっておけばいいよくらいでやっておいてくれていれば、もっと面白かったな。

○委員　ちょっとそれちゃったけれども、変な話、私は高卒で就職しているので、すごくコンプレックスを。世田谷は大卒のお母さんがすごく多いから。だから、Ｐ連会長は本当に嫌だった。高卒でＰ連会長なんて、まずいないと思うな。私、今まで聞いたことがないですもの。普通にＰＴＡ活動をやっているつもりなんだけれども、それがコンプレックスになっちゃうというのは世田谷のあれかもしれないですよ。

○委員　それも地域性なのかもしれないね。

○委員　みんな何ともないよと言ってくれるけれども、自分がね。これは余談ですけれども、今はあまりそういう人がいないから。みんな大学に行く人たちばかりになっちゃったから。ほぼ全員でしょう。

○副議長　そうですね。半数ぐらいは行っていますけれども、どこの学校であれ、何を学んだか、どう生きたかというのが本当は大事ですから。

○委員　少しずつ社会がいろいろ変わってきているので、やはり地元だったり、地域のためにとか、自分が主体的に関われる子どもを育てていくことと、大人がまず率先してそれをやること。それは誰がという否定じゃなくて、自分がというところで。

○委員　そういう大人が増えていけば、もう必然的に学校と地域との関係性は深まるんだということですね。

○副議長　そういう意味では、改めて考えると、本当に単純ですけれども、挨拶は大切ですね。それこそ他者に対する、あなたを認めていますよ、存在していますよという１つの行動ですものね。

○委員　ついこの間、全校朝会で話をして、挨拶にずっとこだわって話をしていたりするので、挨拶を返さない人もいるけれども、挨拶をするとか挨拶を返すというのは、あなたがそこにいることに気づいていますよ、あなたという存在を認めているんですよということなんだよみたいな話はよくしています。

○委員　もう一つ大事だと言われたのは挨拶と返事なんです。だから、はいという返事もそうだけれども、挨拶されたときに自分も返事ができる。それがセットだよ、どっちもできるようになるといいですね。

○副議長　なるほど。聞いていて、何かありますか。

○委員　世代と言ってしまうとおしまいだから､そこに原因を求めてもしようがないので、それはそれで受け止めないとなと思うんだ。

○委員　いつでも、どこでも、誰でもできることをやっていくことは難しいことじゃなくて。

○委員　特別なことじゃないんですよ。

○副議長　できる範囲内でというところを。今はもう完璧を求め過ぎちゃっているから、どうハードルを下げるかですよ。

○委員　決してハードルは高くないのかもしれないですね。

○委員　高くないんですよ。だって、自分ができることをちょっとお手伝いするだけでいいんだから。

○委員　勝手に上げちゃっているというか、高く見えちゃっている気がしますね。

○委員　それはあると思います。

○副議長　なかなか根深いですね。変えるのも難しいけれども、ゆえに先輩たちが、あっ、失敗してもいいんだとか、普通にできることをやっているだけだよという姿を見せればということですね。教員の世界もそうですからね。

○委員　本当にそうですね。

○副議長　どんなベテラン教員でも失敗することはあるんだよとか。やはり意識とか、そういうものを変えないといけないですね。

○委員　キーワードだけ。保護者と先生のコミュニケーションとかね。

　学校チームのほうが話しやすいかも。地域はちょっと難しかった。

○委員　こっちのほうが話が進んだね。

○副議長　そういう意味では、学校が核になっているということですね。

○委員　学校を中心としたね。私、町会も一応書いておきますね。町会、商店街とか。

〔全体〕

○議長　ディスカッション、ありがとうございました。じゃ、どんなお話をされたかを共

有して、その後、全体でさらにディスカッションしていきたいと思います。

それでは、学校グループの皆さんから、こんな話題、こんな話をしたというのをお願いできましたら大変幸いです

○副議長　学校グループなんですけれども、最初からいろいろな意見交換が白熱しまして、まず学校の存在感というところでお話をしたいと思うんですけれども、学校と地域のウィン・ウィンの関係を考えたときに、小学校、中学校、ありますけれども、やはり小学校のほうがよりそれを感じやすい、大変助かっていると。例えばまち探検とか、そういう教育活動には地域の人たちの協力が必要不可欠である。そういったときにキーパーソンとなるのが学校支援コーディネーター、その他学校運営委員とか、そういう方がいるということが出てきました。

一方で、中学校は、物理的な距離もあって、地域の方々が感じた場合には、学校というと、やはり小学校をイメージするだろうと。その学校の存在感、地域と学校のウィン・ウィンの関係といったときに名言が出まして、学校の存在そのものが地域にとってはありがたいんだ、それがウィン・ウィンなんだ、学校がちゃんと子どもたちに向き合って教育してくれれば、当然ながら子どもたちも元気に育って、その姿を地域の人が見ることができること自体が地域にとっては利益になっているというような話が出ました。そういう意味では、学校教育においてしっかりと子どもたちに向き合うことが大切だという話がありました。

あとは、学校と地域の連携をする上でのＰＴＡの存在です。実は学校支援コーディネーターは非常に重要な存在だ。青少年委員とか、地区委員とか、そういう存在も必要なわけですが、ほとんどがＰＴＡのＯＢ、ＯＧという意味では、やはり学校と地域をつなぐ存在として、学校と地域の関係を次に伝えていく存在としてＰＴＡというものが非常に重要な組織であるというような話が出ました。また、地域の組織としては、やはり町会というものも非常に重要な存在だ。

ただ、ＰＴＡや町会というような組織についても、現在の保護者の方の意識。比較的若い保護者の方の意識や先生方の意識によって、つながりというものに必要性を感じなくなっているような世代もいるということで、そこが課題であろうというような話が出ています。そういう意味では、それを解決していくためには、まずは挨拶自体、声をかけるとか、声をかけられることが非常に大切であろうなという話が出ました。

あとは補足をしていただきたいと思います。

○委員　中学生においては、地域も広いので、直接的な地域とのというよりは、いざというときに中学生の力が頼りになるので、ぜひ地域と学校が連携していくことで、顔の見える存在であることが大事かなと思っています。

○委員　ＰＴＡの話が大分出ましたけれども、地域を支えている町会とか、地域のいろいろな活躍をしている人は結局はＰＴＡのＯＢなんだなというところが大きいから、やはりＰＴＡをしっかり支え、逆にＰＴＡが活発な学校ほど地域も協力してくれるなというところが大きいなと感じたところです。

○副議長　ありがとうございます。そういう意味では、保護者の方の意識も話の中でいろいろ出たんですけれども、どのようにその意識を変えるかという課題なんですが、少しハードルを高く見ているんじゃないか。ＰＴＡとか地域の活動も含めて、できることからやればいいんだというようなことを、もちろんＰＴＡのベテランのＯＢ、ＯＧもそうですけれども、学校においてもベテランの教職員が、失敗してもいいんだよというようなことを伝えていくのが必要であろうなという話が出たところです。

○委員　１つだけ思い出したことがあったんですけれども、ＰＴＡというものが学校と地域の連携の中で一つ大きな役割を果たしていくという話の中で、先ほど学校は今やっている教育を地道にやっていくことが、つまり地域にいる子どもたちの教育をしっかりやっていくことが重要だということプラス、ＰＴＡということでいうと、今、目の前にいる保護者と教員がしっかり連携していくことが、将来にわたって学校と地域が深いつながりを保つことにつながるのではないかというような話も入っていました。

○議長　ありがとうございました。

　では、もう一つの地域グループです。最初は本当にいろいろな御意見があったんですが、冒頭御紹介した尾山台中学校ないし尾山台小学校は、私から見ると、もともとなぜかオープンな学校で、視聴覚室をどんどん使ってねとか言われるし。それが普通じゃないんだとすると、何が違うんですかねという話から始まりました。そうしたら、地域のムードがそうなっているとか、校長先生がそうだからじゃないかとか、地域の顔が見えているからかなみたいなことが出てきて、生活感がある感じがいいとか、学び方とか、大学があるのがいいねという話があって。でも、他の大学だとこうだし、何とか学部だとこうだし、教育系がいいのか。じゃ、あんたの学部は何なのというお話をしていただいたので、ふと思いついて、その前にウィン・ウィンというのもちょっと違和感があるよねみたいなことも出ていたんですけれども、その提案を思いついたのが、全然この分野と関係ないんですけれ

ども、ちょっと異質な言葉なんです。「オープンイノベーション」という言葉があって、何か新しいものをつくるときに、自分の中だけ、学校だったら学校の中だけで新しいことをやるというのがこれまでのやり方だったんですね。オープンイノベーションという考えが出てきて、自分の中の資源だけではできないから、よそのものを借りてきて作るということが始まったんですね。だけれども、それには限界があることがすぐ分かった。なぜかというと、よその力を借りて自分だけ得しようとすると、そんなにいいことは起こらない。

今ヨーロッパを中心にオープンイノベーション2.0のフレームワークが大事だと言われていて、それは何かというと、自分のところの資源とほかのところの資源を使って、自分のところだけではないものを作る。つまり平たく言うと、地域の力を使って学校をよくするとか、学校の力を使って地域をよくするんじゃなくて、地域と学校といろいろな人が協力して社会をよくするというフレームワークが大事なんだというのを思いついて、おやまちプロジェクトを振り返ってみると、子どもが面白いと思えるプログラムになっているのがいいよねとか、いろいろ出たのが、単に学校だけができることでもなく、事業者だけができることでもなく、大学だけができることでもなく、みんなが自分たちの持っている資源を持ち寄ることで資源のつながり方が変わって、それぞれの役割が再定義されて、役割の組替えが起こって、結果的に学校の中でもこれまでになかった授業ができるし、子どもが喜ぶし、大学生もメリットがあるし、地域の事業者も自分たちが持っているものがまさか中学生に役立ててもらえるとは思っていなかったし、中学生がつくったものが自分のところの商売にも使えるんだということが起こっているんだというふうに見ると、ウィン・ウィンということでもないなとか、そういうほうが腑に落ちるのではないかみたいな話になってきた。

じゃ、オープンイノベーションが起こるには何が必要なのと考えると、基本的にはベースとなるソーシャルキャピタル、顔が見える関係性がないと駄目なんだけれども、顔が見えている関係性が固定的でも駄目で、絶えず新しい人が入ってきてくれるとか、そういう動いていることが大事だし、決めたからやってよみたいなのじゃなくて、振り返ってみると、尾山台中の人も、尾山台小の先生も相談に来るんですよね。どうしたらいいですかみたいな。その相談に大学が答えるんじゃなくて、来た相談を別の人につなげるみたいなことが確かに起こっていた。そうすると、そこにいろいろな相談がどんどん持ち込まれていて、いろいろな人が絶えず出入りをしていると、これまでにない解決の仕方がたまたま生まれる可能性があって、まず、これが大事なのではないかみたいな話をしていました。

最後に大事なことを。要は学校のために何か力になりたいみたいに考えると限定されちゃうんだけれども、地域がどんどんよくなってほしいよね、私の暮らしがどんどんよくなったらいいよね、そのために私は何ができるんだろうかというマインドでみんなが持ち寄ると、みんなのモチベーションになるし、結果的に地域がよくなって、学校もよくなるという構図なのではないかと。確かにそれだとモチベーションもアップするし、いいねというようなことを話しました。大体以上です。ありがとうございました。

もし何か補足がありましたらお願いできればと思うんですが、残り10分、15分ぐらいですか。こういう２つのグループワークの結果を踏まえて、まとめというか、お互いどう思ったかとか、これとここが結構響き合っていたとか、いろいろあると思うんですけれども、少し議論していただきたいと思います。いかがでしょうか。

○委員　大学という観点を入れたのは僕自身は今ちょっと関心がなくて、我々のグループは小学校のことばかり話していたけれども、そう言われてみれば、高校とか大学との連携という観点も少しあるんだなと。

○議長　たまたま地域と小学校で大学があるといいねという話が出て広がったんですけれども、結局大学も多様な地域のアクターの一つで、学校が中心でもいいんですけれども、要は地域のいろいろな人たちが関わり合えるという状況。大学はその要素、地域の多様性みたいなものが大事なのかなみたいなことも思いました。

○委員　私の住んでいる地域も大学がありますけれども、何か接点があるかなとか思ったけれども、ちょっと思い浮かばないので、またその辺を地域に引き入れてもいいかなと思っております。

○委員　学校グループで出たＰＴＡの存在ですね。地域グループにもやっぱり出ました。学校と地域をつなぐ一番の大きな要素だろうと。ジョインターとしては非常に重要な要素だろうな。「アフターＰＴＡ」という言葉を使いましたけれども、青少年委員さんとか、地域のそういう活動をしている人は大体ＰＴＡ経験者である。この辺はやっぱり一つの落としどころかなというふうな話は地域グループでも出ました。

先ほどから出たオープンイノベーションですけれども、所属のところだけで完結するのではなくて、やっぱり新しいほかの要素を入れる。それもやっぱり人なんです。どういう人がそれに当たるのかというのは地域の中でいろいろ検討していく。それが一つの焦点になるのかなというような気がしています。これは1.0から2.0という、恐らく今の尾山台地域は2.0の指標なのかな。これにどこまでほかの地域が近づけるかというのが１つの大き

な課題とも思いました。それのポイントはやっぱりＰＴＡかなと私も感じました。

○議長　ＰＴＡで人材がどんどん育っていって、ＰＴＡを離れたときに力を発揮されているというのは本当にそのとおりだと思います。

○委員　先ほど大学生の話が出たときに、町会の運動会があって、今はお引っ越ししちゃったんですけれども、交番のすぐそばに大学柔道部の合宿所があったんですよ。その方たちが毎年町会の運動会に参加してくださって、いろいろ活躍してくれたことがありました。だから、大学そのものであってもいいし、どこかのサークルとか部活でもいいんだけれども、そういうところでちょっと年上のお兄さんやお姉さんが活躍してもらえるといいのかななんて、今伺っていて思ったのが１つ。

世田谷区は町会がちゃんと存続している地域なので。ただ、さっき出たお祭りとか、盆踊りとか、町会ではいろいろやってくれるんだけれども、要するに保護者に当たる人たちは、参加はするけれども、町会の会員にはならないんですって。そういうのが課題になっていると町会の人たちから聞いているので、みんなが町会に入って、子どもたちもそこで楽しませてもらっているよね、町会はこんなことをやっているよというのがまた、保護者だったり、地域の人に伝えられる。学校は町会の宣伝はできないけれども、ＰＴＡだよりとか、ＰＴＡからは町会のことも紹介できるんじゃないかという話をさせてもらって、結局町会にみんなが加入してくれたり、そういうことで世田谷区自体が、大きな意味ではまちづくりが活性化するんじゃないかと。そんな話も出ました。

○委員　今、地域グループのほうの発表を聞かせていただいていたときに、例えば今日の議事は新たな連携・協働のしくみづくりに向けた課題の抽出・整理と方策についてとなっているんですけれども、連携・協働というと、例えばＡとＢがあって、この２つが連携したり、協働したりという形なんだと思うんですけれども、そもそも学校と地域はそういう関係ではないんじゃないかなという気が何となくしちゃいました。

先ほどの話の中にもあったんですけれども、学校も地域の中の一つなので、学校も含めて、この地域にいるみんなが、自分も含めてみんなが幸せになるために、じゃ、それぞれの立場で何をしたらいいのという考え方のほうがいいのかな。この土地にいるみんなが幸せになるために、じゃ、教員はこれができるとか、保護者はこれができる、地域の商店はこれができる、大学生はこれができるという、それぞれの役割で何ができるかと考えていったほうがいいのかな。連携・協働という言葉を一回頭から外したほうがいいのかなという気がしました。

○議長　めちゃめちゃ分かりやすく言っていただいたと思います。なるほど。いや、本当にそのとおりですよ。

この後、今日の結果を踏まえて整理していく、まとめていくというときに、要は地域のいろいろな人との連携がやっぱり大事で、ＰＴＡの役割はすごく大きいし、町会もいろいろな役割があります。ただ、連携・協働と言ってしまうと結構固定的になっちゃうし、学校と地域みたいな構造自体が違って、それを一回解体してみて、みんなが地域の中にいます。地域がよくなるためにその人たちがそれぞれどういう役割を果たしていこうかというのをもう一回、そこで新しい組替えも含めて起こっていくというふうに見たほうが物事がよく見えるし、可能性が見えるじゃないかという話なのかなと思うんですね。それを踏まえると、両方のグループの話は違うことを言っているわけではなくて、実は同じことを別の解釈で言っているように見えてきました。

あとは、どうなったらそうなるか。課題の定義が見えてきたので、本当はもう一回ブレストして、そのために必要なものは何なの、どのようにしたら少しでもそのようになっていくのみたいなことを話したい感じは今すごくしているんです。定刻が近づいていますので、ほかにも何かご意見ありましたらぜひお願いいたします。

○委員　今のお話はすごく分かりやすかったです。目指すところがどこなのかということを置けば、それに向けて、ここはこういうことができる、ああいうことができるというのがそれぞれの役割、立場によって明確になってくるかなと思うので、そこを統一というか、一つの話題にすることはできないでしょうか。何のためにそれをしていくのかが見えてくれば、おのずと見えてくるかなと思います。

○議長　おっしゃるとおりだと思います。

○委員　前回、地域グループで話し合ったところに書いてあるんですけれども、どういう未来をつくりたいのか、安心して住み続けたいまちづくりというところが必要なんじゃないかなと私は思っているんです。ざっくりとしているんですけれども、このまちにずっと住み続けていきたい、それにはという話ではどうでしょうか。

○委員　ちょっと細かいことで申し訳ない。具体的に自分の学校を取り巻く地域、範囲はどのような捉え方をされますか。

○委員　小学校は、やっぱりどうしても学区域というものをイメージしますし、そういう人間が多いんじゃないかなと思います。ただ、学区域というのは線引きされたものです。でも、その子たちが住む地域、生活圏というのは学区域だけではないので、もう少し広げ

た範囲、その子たちが暮らすまちというところまでかなとは思いますけれども、どこかで線を引けと言われたら、学区域という線の引き方をするしかないかな。

○委員　ちゃんとやる必要はないと思いますけれども、どの程度の範囲を地域と考えるかというのも１つかなと。

○委員　イメージは学区域プラスちょこっとみたいな感じ。

○委員　世田谷区の場合には学び舎という大きな範囲はありますね。それも１つの地域でしょうし、世田谷区全体とも取れるかもしれないですよね。

○委員　本当にそうですよね。今は地域と言っちゃっているけれども、地域をどのように捉えるかというのは、言われてみれば確かにあまり頭の中をクリアにして話していなかったなと反省しているところです。

○委員　ある程度の目安はありますよね。

○副議長　その地域という概念をどう捉えるかは学校種によっても大分違うだろうし、高校や大学なんていろいろなところから通ってくるから、地域といったら、私なんかは、やっぱり大学がある立地のところを地域といいますよね。小学校なんかは小学校区、中学校も中学校区というような明確に地域観がある中で、それは地縁的なつながりだと思うんですけれども、目指すところが一緒という意味では、そちらは志なり、支援的つながりなわけですよ。だから、地縁ももちろん大切なんだけれども、支援。目指すところは一緒だよねというところでのつながりをつくり出していくのが課題なのかな。そういう意味では、言い方は適切かどうか分からないですけれども、小学校という１つの物理的な空間とか、そういうものはやっぱり核になるんだろうなと思うんですよ。小学校発信でＰＴＡがあり、町会と結びついていて、各人たちを結んでいるという意味では、ある意味本当にネットワークの拠点かなとは思います。

　ただ、地域をどう捉えるのというのは課題ですよね。オープンイノベーションの考え方からすれば地域外の人も入れてというところですものね。

○議長　そうですね。

○副議長　でも、そういえば、1990年代半ばは学校が地域を立て直すという文脈で学校評議員制度が導入されたんですよ。学校が地域の核になる。でも、2000年代ぐらいになると、学校を変えるために地域の人たちが必要だと言い出して、その時点では、お互いが再生同士でウィン・ウィンだねという文脈だったと思うんです。教育政策って。だから、世田谷なんかは大分進んでいるので、もうそろそろ議長がおっしゃるような次のステージなのか

なと思います。

○委員　今、地域の中心が学校というのは全くいいんですけれども、あまりここには出てこなかったんだけれども、影の主役としてまちづくりセンターというのがあるんじゃないかなと思うんですよ。我々がＰＴＡのＯＢとして活動してるときに、まちづくりセンターを経由していろいろなことをやっているので。まちづくりセンターは一見単なる世田谷区役所の出先機関なんですけれども、地域にとっては、何でも相談できて、いろいろな団体の中継地点になっているから、まちづくりセンターは影の主役なんじゃないかなとも思っているので、これも世田谷区としては外せないんじゃないかなと思います。その話はあまり出てこなかった。今は学校の話ばかりしちゃっていたけれども、まちづくりセンターは世田谷にとって重要です。そこの職員は本当によくやってくれている。

○議長　ちょっと時間が過ぎてしまいましたので、全体のディスカッションはこちらで区切って、地域のいろいろなアクターがそれぞれ役割をちゃんと果たすことによって学校もよくなれば､地域全体もよくなっていくという見通しが少し見えてきたのかなと思います。ありがとうございました。

じゃ、ディスカッションは以上ですが、次回の日程、その他の連絡事項に行きたいと思います。

日程調整について、事務局の皆さん、次は大体いつぐらいという予定になるでしょうか。

○事務局　一番後ろに会議資料３というスケジュール案がございます。それを見ていただきたいと思いますが、本日は第５回目となります。予定ですと、次回はこれまでグループワーク①、②をしていただいたまとめということで、そこが見えてくると、骨子案ができてくるのかなと思っておりますので、次回は骨子案、まとめの核になる部分を検討していただきたいと思っております。できれば年度内に報告書のまとめの承認をしていただきたいと考えていますので、最終回は２月を予定してございます。そうすると、その前の７回目が１月、タイトですけれども、６回目が12月。ただ、12月も年末ということで、第２週から第３週ぐらいのところを予定していますが、日程が合わないと１月にずれ込むという形にもなりますので、よろしくお願いいたします。

ちなみに、年間で予約していますので、12月13日（月）は会場を確保しております。

（　日程調整　）

○議長　では、次回は12月13日（月）18時30分からの開催といたします。ほかに事務局の皆さんからの連絡事項などありますか。

○事務局　参考資料がお手元に４点ほどございます。時間の関係で説明は割愛させていただきますが、既にお持ちになってということであれば席に置いてお帰りいただければと思います。よろしくお願いいたします。

○議長　本日の会議はこれでおしまいにしたいと思います。次回は12月13日（月）ということで、どうぞよろしくお願いします。

今日はお疲れさまでした。ありがとうございました。